

平成 26 年度  
文部科学省委託調査

先導的<sub>な</sub>大学改革推進委託事業  
「資格・検定試験の大学入試への活用促進に関する調査研究」  
報告書

平成 27 年 3 月

株式会社政策研究所



## 目次

調査の概要 .....	1
1 調査の目的.....	1
2 調査方法 .....	1
第1章 資格検定試験活用の状況.....	3
1 大学へのアンケート調査 .....	3
(1) アンケート調査方法 .....	3
(2) 調査結果.....	4
2 大学へのヒアリング調査 .....	15
(1) ヒアリング対象 .....	15
(2) ヒアリング内容 .....	15
第2章 資格・検定試験実施機関における資格・検定試験の実施状況.....	21
1 アンケート調査.....	21
(1) アンケート調査方法 .....	21
(2) 調査結果.....	21
2 資格・検定試験実施機関へのヒアリング調査.....	28
(1) ヒアリング対象 .....	28
(2) 主なヒアリング内容 .....	28
第3章 資格・検定試験活用における効果と課題.....	30
1 資格・検定試験の活用の効果.....	30
(1) 入学者の能力評価に関して.....	30
2 資格・検定試験の活用の課題.....	31
(1) 資格・検定試験の質が不明.....	31
(2) 資格・検定試験の認知度の低さ .....	32
(3) 学習指導要領との対応性が不明確.....	32
第4章 課題解決と資格・検定試験の活用を普及・拡大するための方策.....	34
1 資格・検定試験の質の担保.....	34
2 資格・検定試験の認知度を高める .....	35
3 学習指導要領との対応を明確にする .....	36
4 大学のアドミッションポリシーの提示.....	37
5 大学入学者選抜への資格・検定試験活用に係るガイドラインの策定 .....	37
6 大学、高校、実施機関による資格・検定試験活用の情報交換 .....	39
7 大学が求める学力と資格・検定試験の学力との関係性を明確化.....	39
8 暫定的に大学入学後の学生の能力評価に資格・検定試験の活用を導入.....	39

資料編



### 1 調査の目的

中央教育審議会高大接続特別部会では、昨年10月末の政府の教育再生実行会議における「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第四次提言）」を踏まえ、能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価するものに転換していくための具体的な方策を検討し、その中で、各種の資格・検定試験の一層の活用促進についても論点として取り上げた。

本調査では、これらを踏まえて、多様な能力を持った学生がその能力を大学入学者選抜にも活かせるよう、資格・検定試験の大学入学者選抜への効果的活用方策を検討することを目的としている。

調査に当たっては、大学や資格・検定試験実施機関へのアンケート調査やヒアリング調査等を行い、資格・検定試験を大学入学者選抜に活用する上での課題等を収集・分析し活用方策を検討する。

なお、本調査で扱う資格・検定試験は、英語や簿記、数学、情報処理といった、主に民間事業者が実施している資格試験及び検定試験を対象としている。

### 2 調査方法

#### ○大学及び実施機関へのアンケート調査

全国の大学（国立、公立、私立大学及び短大を含む）に対するアンケート調査を実施した。  
調査対象：全国の大学 1,125 大学

#### ○ヒアリング調査

アンケート調査結果を踏まえて、資格・検定試験を活用している大学、活用していない大学、大学において活用されている資格・検定試験の実施機関を選定し、その状況についてヒアリング調査を実施した。

ヒアリング対象大学：4 大学

ヒアリング対象実施機関：3 機関

#### ○検討委員会の設置運営

資格・検定試験活用に関して知見のある学識者、実施機関関係者等による検討委員会を設置し、助言を受けながら調査及び分析方法、資格・検定試験活用方策を検討した。

##### 【検討委員会委員】

田中 義郎（桜美林大学教授）

西辻 正副（奈良学園大学副学長）

蛭川 幹夫（城西大学教授）

三木 伸良（指定非営利活動法人全国検定振興機構理事）

吉田 研作（上智大学教授）

## ○資格・検定試験活用の普及拡大の方策の検討

アンケート調査については必要に応じてクロス集計分析等を行い、ヒアリング調査結果や検討委員会からの助言等を踏まえながら、資格・検定試験の活用を普及拡大するための方策を整理した。主な方策は以下のとおりである。

- 資格・検定試験の質を担保する
- 資格・検定試験の認知度を高める
- 学習指導要領との対応性を明確化する
- 大学のアドミッションポリシーを提示する
- 大学入学者選抜への資格・検定試験活用に係るガイドラインを策定する
- 大学、高校、実施機関による資格・検定試験活用の情報交換を行う
- 大学が求める学力と資格・検定試験の学力との関係性を明確化する
- 暫定的に大学入学後の学生の能力評価に資格・検定試験の活用を導入する

# 第1章 資格検定試験活用の状況

## 1 大学へのアンケート調査

### (1) アンケート調査方法

#### ①アンケート調査対象

・全国の大学（短大等含む） : 1,125 大学

#### ②調査実施時期

平成 26 年 11 月～平成 26 年 12 月

#### ③回収状況

・全国の大学（短大等含む） : 685 大学 (60.9%) 注)

#### ④主な質問項目

- ・平成 26 年度大学入学者選抜試験の状況
- ・平成 26 年度大学入学者選抜試験における、資格・検定試験の活用状況
- ・大学入学者選抜試験に、資格・検定試験を活用するようになった経緯
- ・大学入学者選抜試験に、資格・検定試験を活用することでの効果と課題
- ・大学入学者選抜試験に資格・検定試験を活用していない理由
- ・今後、活用するための条件
- ・多くの大学で資格・検定試験が大学入学者選抜に活用されていくための方策

注) 集計上、学部分類は表 1.1 のようになっている。

表 1.1 学部分類表

大分類	学部中分類	大分類	学部中分類	大分類	学部中分類	
人文科学	文学関係	農学	農学関係	教育	教育学関係	
	史学関係		農芸化学関係		小学校課程	
	哲学関係		農業工学関係		中学校課程	
社会科学	法学・政治学関係		農業経済学関係		高等学校課程	
	商学・経済学関係		林学関係		特別教科課程	
	社会学関係 (社会事業関係を含む)		林産学関係		盲学校課程	
理学	数学関係		獣医学畜産学関係		聾学校課程	
	物理学関係		水産学関係		中等教育学校課程	
	化学関係		保健		医学	養護学校課程
	生物関係				医学	幼稚園課程
地学関係	歯学	体育学関係				
工学	機械工学関係	歯学		体育専門学群		
	電気通信工学関係	薬学関係	障害児教育課程			
	土木建築工学関係	看護学関係	芸術	美術関係		
	応用化学関係	医学専門学群		デザイン関係		
	原子力工学関係	医学専門学群		音楽関係		
	応用理学関係	商船	商船学関係	芸術専門学群		
	鉱山学関係	家政	家政学関係	その他	教養学関係	
	金属工学関係		食物学関係		総合科学関係	
	繊維工学関係		被服学関係		教養課程(文科)	
	船舶工学関係	住居学関係	児童学関係	教養課程(理科)		
	航空工学関係			教養課程		
	経営工学関係			人文・社会科学		
	工芸学関係			国際関係学		
			人間関係科学			

注) 調査結果のグラフの中で記載されている「(n=〇〇)」は、回答の母数を示す数値である。

例) (n=685 大学)は回答した大学数を示し、(n=978 学部)は各大学が回答した学部数を示している。

## (2) 調査結果

### ①資格・検定試験の活用の有無と活用した試験

#### 【大学の資格・検定試験の活用の有無】

平成 26 年度大学入学者選抜試験において、資格・検定試験の結果を活用した大学は 685 大学の内 238 大学となっている。

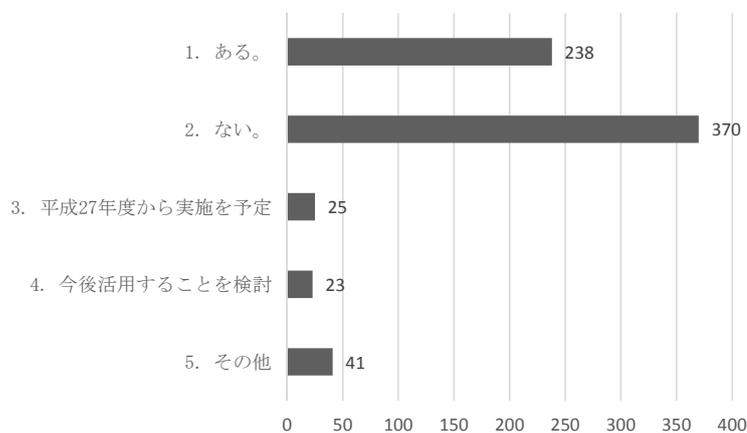


図 1.1 資格・検定試験活用の有無(n=685 大学)

#### 【学部別資格・検定試験の活用の有無と活用した試験名称】

学部(978 学部)における資格・検定試験の活用状況を見ると、図 1.2 に示すように社会科学系及び人文科学系が多くなっており、資格・検定試験の別では、図 1.3 に示すように実用英語技能検定や TOEFL 等の英語系が多くなっている。

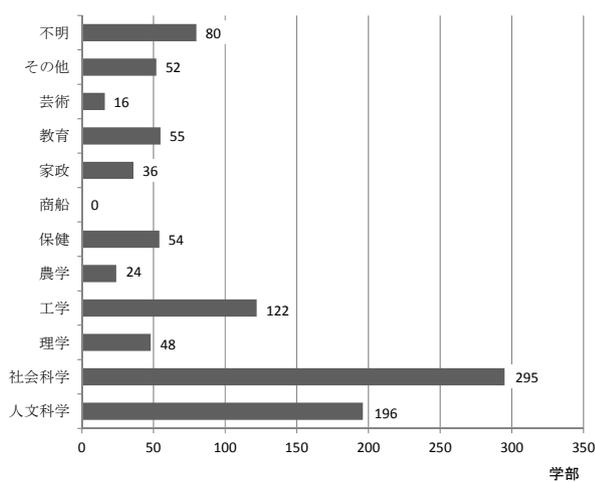


図 1.2 学部別活用状況(n=978 学部)

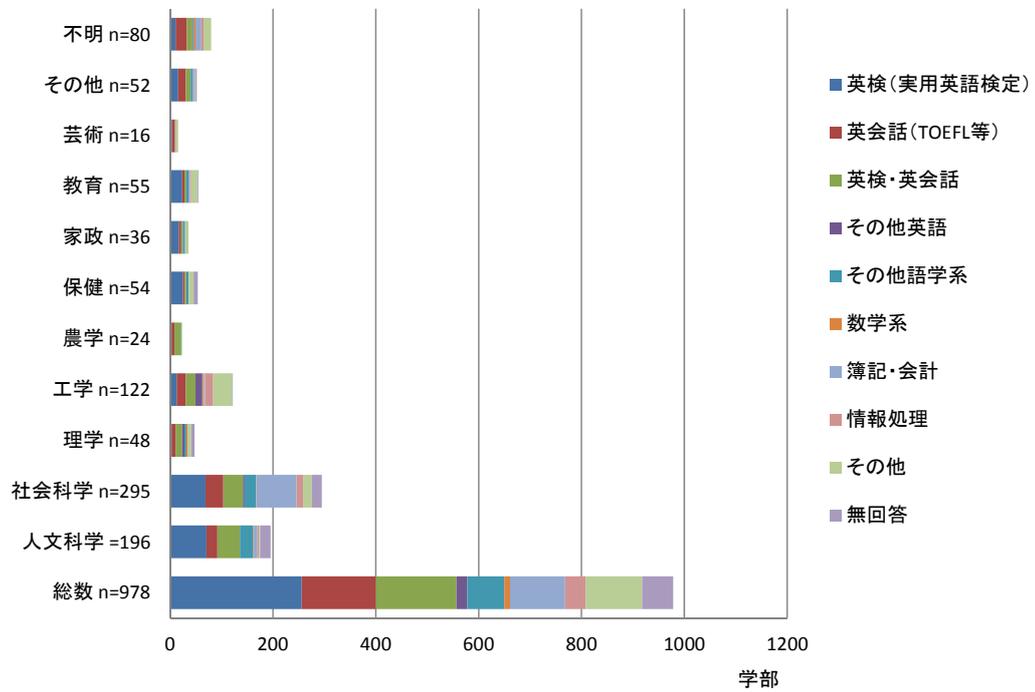


図 1.3 学部別入試に活用した資格・検定試験 (n=978 学部)

## ②資格・検定試験の活用理由

学部を対象として資格・検定試験の活用理由を聞いたところ、図 1.4 に示すように「特定の教科・科目について、能力を評価することができる」という回答が多くなっている。

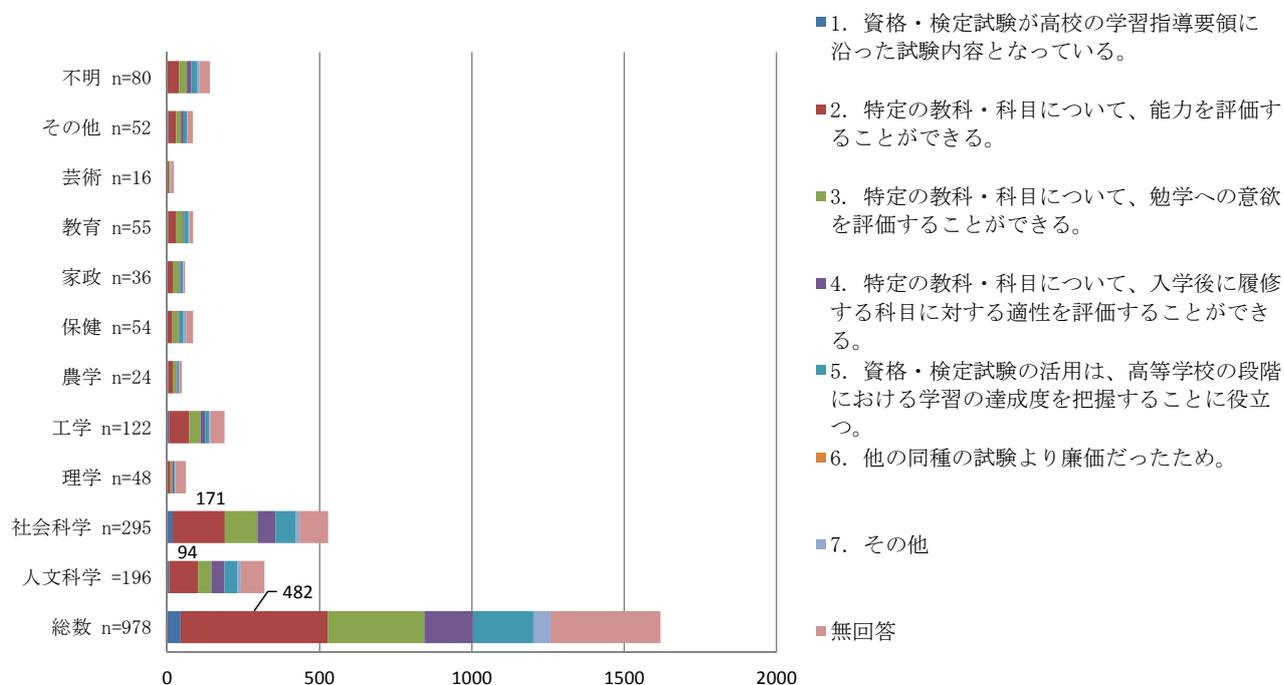


図 1.4 学部別入試に活用した理由 (n=978 学部)

### ③資格・検定試験の活用方法

資格・検定試験をどのように活用しているかを学部別に見ると、図 1.5 に示すように社会科学、人文科学では「一定以上の成績又は資格取得を出願時の必要条件として採用する」という回答が多く、次いで「資格・検定試験の成績を、個別試験の点数に加点する」という回答となっている。

同様に、図 1.6 は英語と英語以外のその他について、どのように活用しているかを整理したもので、英語では「一定以上の成績又は資格取得を出願時の必要条件として採用する」また、「資格・検定試験の成績を、個別試験の点数に加点する」という回答が多い。

英語以外のその他についても一定以上の成績を条件とする意見が多くなっていることから、大学側としては、成績評価が可能な資格・検定試験を活用しているものと判断される。特に英語ではその傾向が強い。

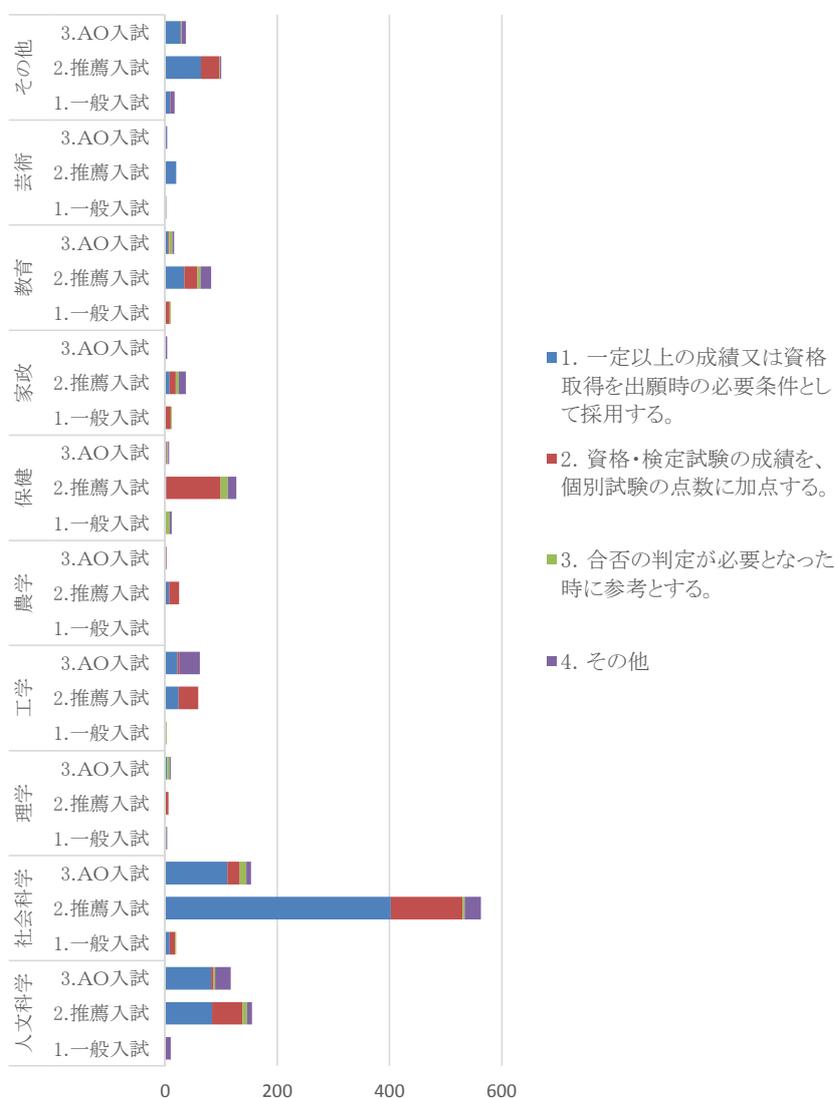
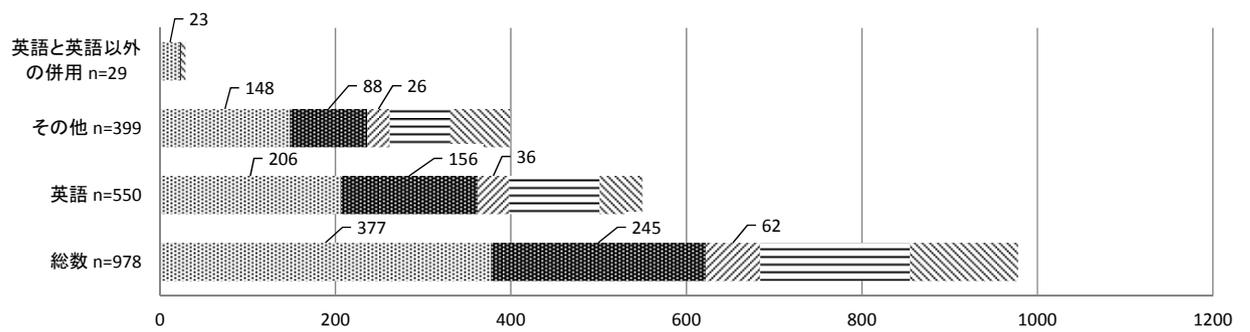


図 1.5 学部別に見た資格・検定試験の活用方法 (n=978 学部)



※1. 一定以上の成績又は資格取得を出願時の必要条件として採用する。

※2. 資格・検定試験の成績を、個別試験の点数に加点する。

※3. 合否の判定が必要となった時に参考とする。

※4. その他

◇ 無回答

件

図 1.6 資格・検定試験の活用方法 (n=978 学部)

#### ④資格・検定試験の活用による効果

活用の効果では、図 1.7 に示すように「入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある」という効果が最も多く、次いで「多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある」となっており、大学側は資格・検定試験について、学力面での能力評価が可能であることを効果としていると考えられる。

同様に、図 1.8 は英語と英語以外のその他について整理したもので、英語についても「入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある」、次いで「多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある」が多く、学力面での能力評価ができることを効果としている。

一方、英語以外のその他では、能力評価よりも「多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある」という回答が多くなっており、学力だけでなくその他の多様な能力を評価できることを効果としている。

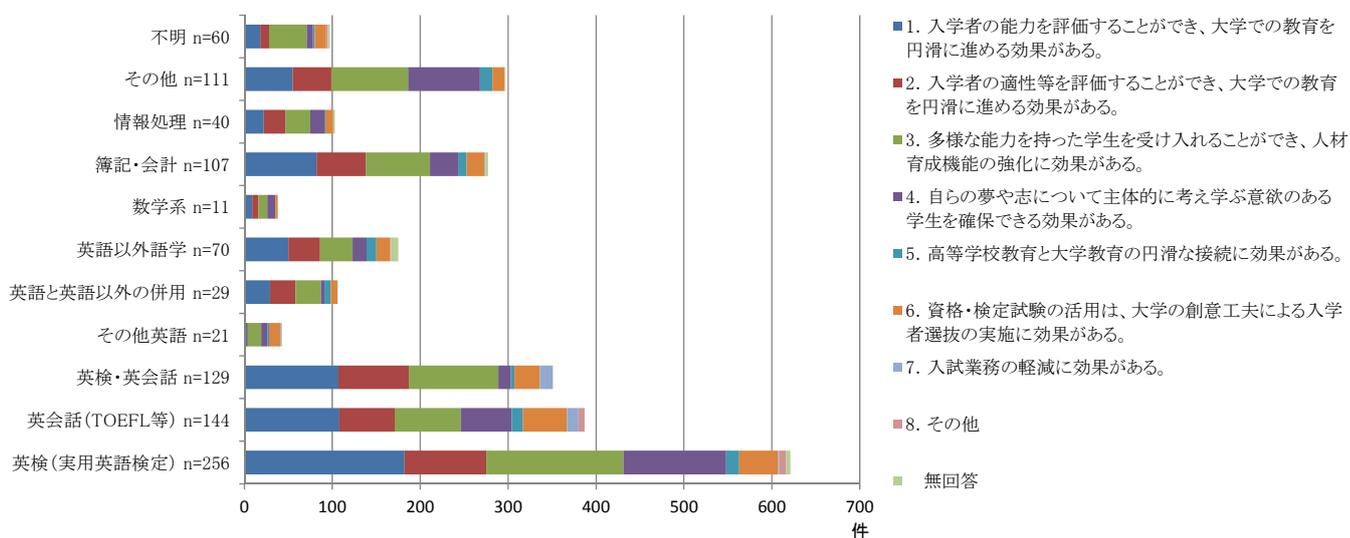
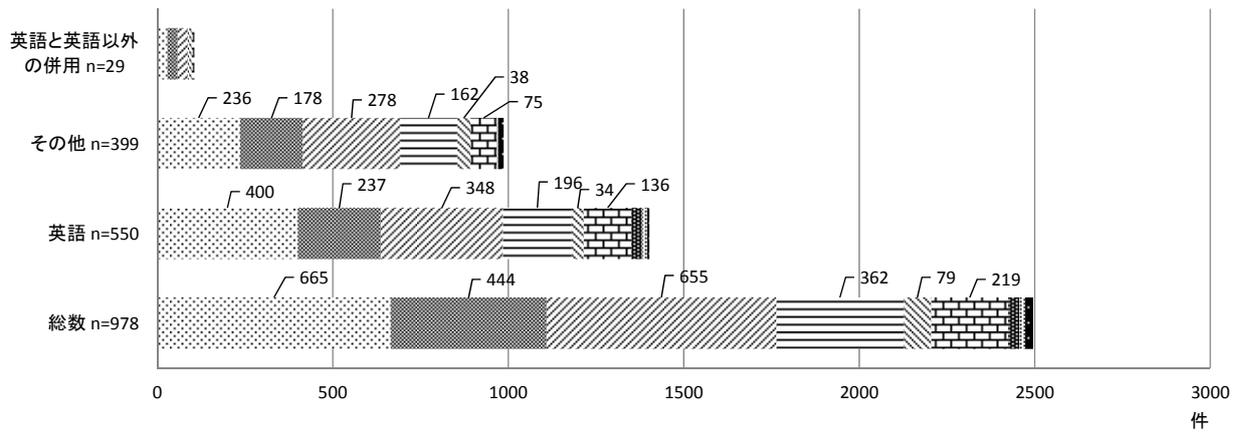


図 1.7 活用する上での効果(n=978 学部)

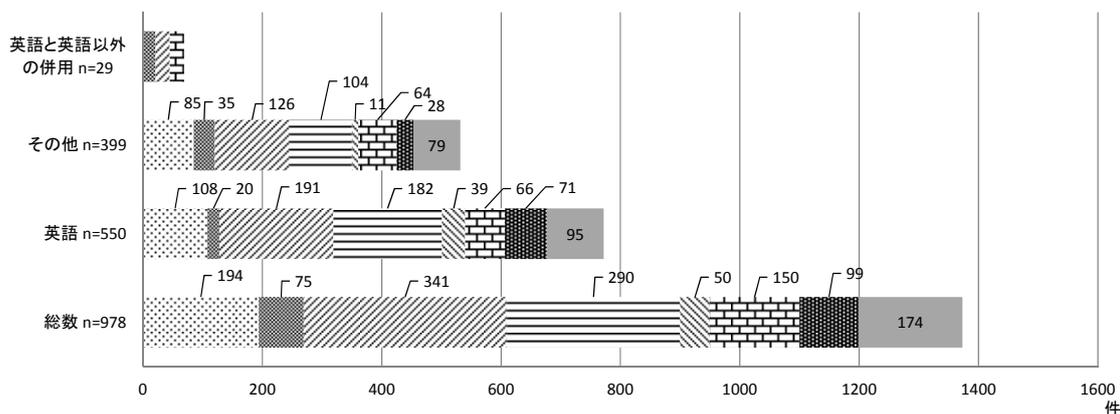


- 1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
- 2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
- 3. 多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある
- 4. 自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある
- 5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある
- 6. 資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学選抜の実施に効果がある
- 7. 入試業務の軽減に効果がある
- 8. その他
- 無回答

図 1.8 活用する上での効果 (n=978 学部)

## ⑤資格・検定試験の活用に対する課題

活用の課題については、図 1.9 に示すように「大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない」という回答が最も多く、次いで「資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している」となっている。この傾向は英語と英語以外のその他の科目でも同様である。



- ※1. 資格・検定試験を活用して入学した学生について、資格・検定の修得により評価した能力にばらつきが見られ、一概に効果を見いだしにくい
- ※2. 資格・検定試験の中には、高等学校の学習指導要領に沿った内容となっていないものがあり、選定が困難
- △3. 大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない
- 4. 資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している
- △5. 受験生の経済的負担が増える
- △6. 資格・検定試験の質や信頼性が担保されているかどうかに関心がある
- 7. その他
- 無回答

図 1.9 活用に対する課題(n=978 学部)

## ⑥資格・検定試験を活用していない理由

活用していない理由としては、図 1.10 に示すように「これまでの選抜試験方法で特段問題ない」が最も多く、次いで「資格・検定試験で測られる能力（知識、技能等）が大学教育で求められる能力に対応したものか分からない」となっている。

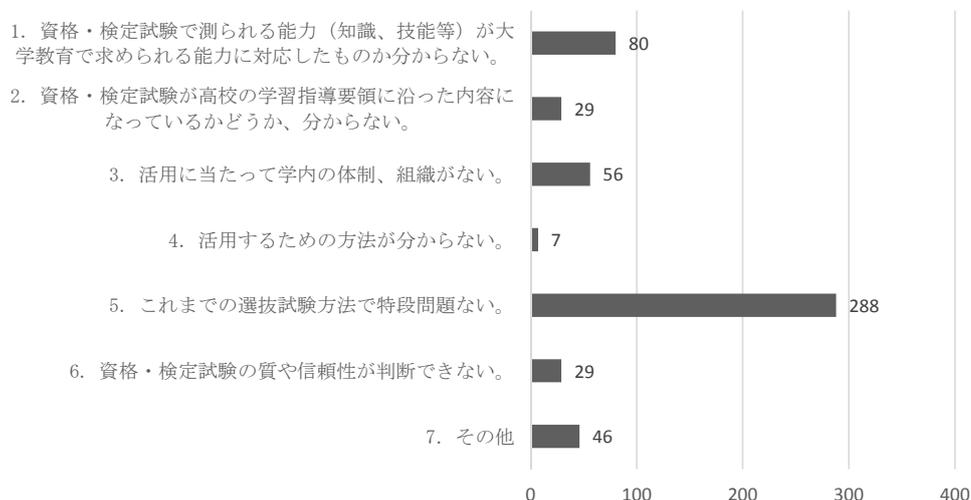


図 1.10 入試に活用していない理由 (n=685 大学)

## ⑦平成 27 年度から活用予定の資格・検定試験と活用理由、評価する能力

### 【平成 27 年度から活用予定の資格・検定試験】

平成 27 年度から実施予定の資格・検定試験は、図 1.11 に示すように TOEFL や実用英語技能検定など英語が多くなっており、その活用理由は「特定の教科・科目について、能力を評価することができる」が最も多く、次いで「特定の教科・科目について、勉学への意欲を評価することができる」となっている。

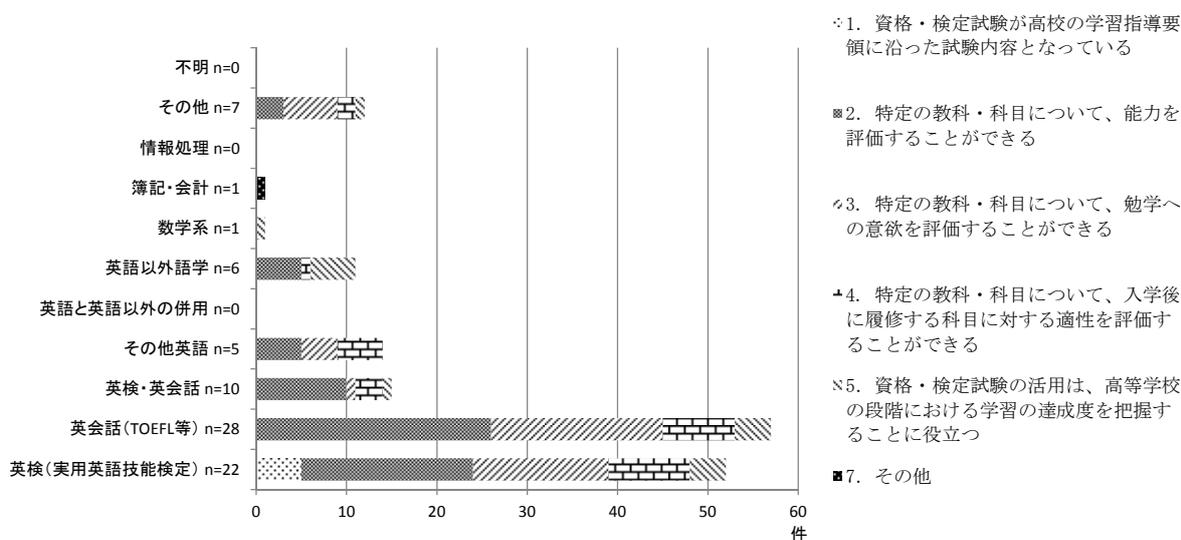


図 1.11 平成 27 年度から資格検定試験活用を考えている理由 (n=80 大学)

## 【平成 27 年度から活用予定の資格・検定試験の評価する能力】

平成 27 年度から活用予定の実用英語技能検定や TOEFL 等の英語の資格・検定試験については、図 1.12 に示すように外国語への理解と会話力を評価する能力として挙げている。

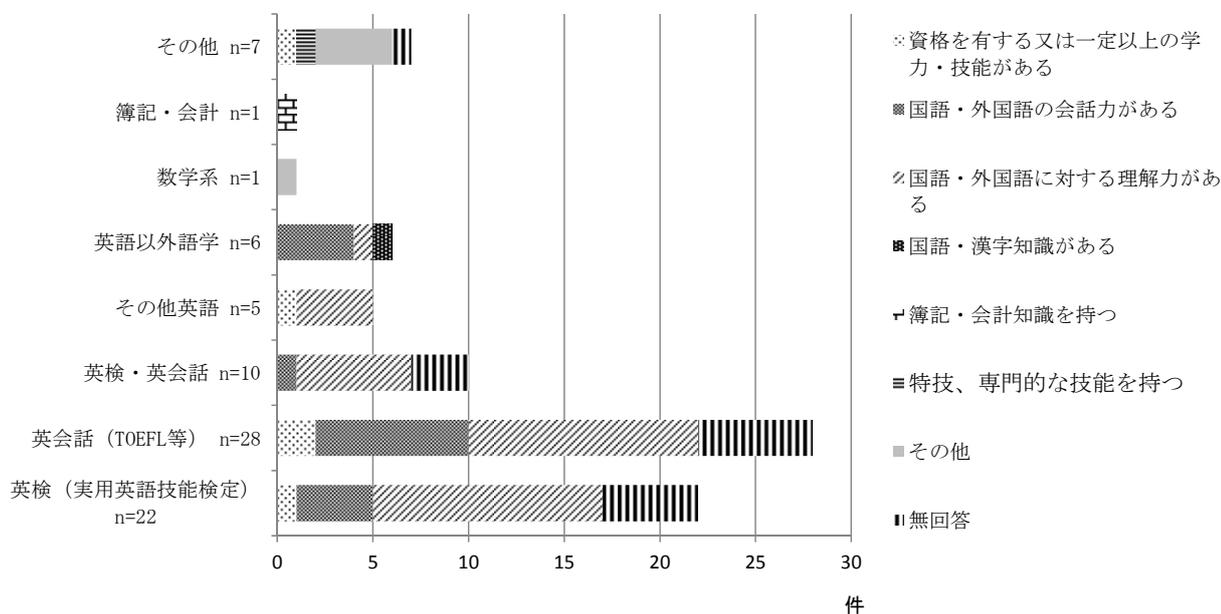


図 1.12 平成 27 年度から活用予定の資格・検定試験の評価する能力(n=80 大学)

## ⑧ 今後活用を検討している資格・検定試験

今後活用を検討している資格・検定試験は、図 1.13 に示すように実用英語技能検定が多く、次いで TOEFL 等となっており、英語がほとんどである。図 1.12 にも示しているように、大学側は英語について一定以上の学力や技能の評価、会話力や理解力等を評価できると判断しているものと考えられる。

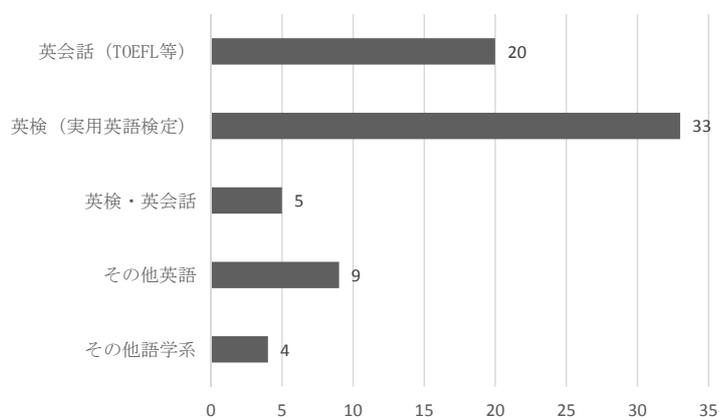


図 1.13 今後活用予定の資格・検定試験 (n=71 大学)

### ⑨ 今後資格・検定試験を活用するために必要な条件

今後活用するために必要な条件を聞いたところ、「大学入学者選抜における資格・検定試験の評価手法を構築することが必要」が最も多く、次いで「資格・検定試験を活用した成果事例を収集し、参照できる仕組みを構築することが必要」となっている。

### ⑩ 資格・検定試験の活用拡大方策

資格・検定試験の活用拡大方策としては、図 1.13 に示すように「大学入学者選抜における資格・検定試験の活用に係る一定のガイドラインを策定する」が最も多く、次いで「資格・検定試験について、今後とも入学者選抜試験に活用できるよう、大学、高校、資格・検定試験主体者等で情報交換を行う」となっている。

またその他として以下のような意見が挙げられている。

- ・ 資格活用の状況を全大学が共有できるよう、事例紹介があるとよい。
- ・ 資格・検定試験の出題評価方法を完全に開示し、大学がその資格・検定試験を評価できるようにする。
- ・ 各種資格・検定試験の活用に係るガイドライン案を示す。
- ・ 第三者が検証し、選抜に際し適したものと公に認めることも必要。
- ・ 各資格・検定試験間の得点換算が容易ではないため、一律のガイドラインを策定する。
- ・ 資格・検定試験は数が多く、どの資格がどの程度の力を証明するのかを公的機関が認証すると利用しやすくなる。

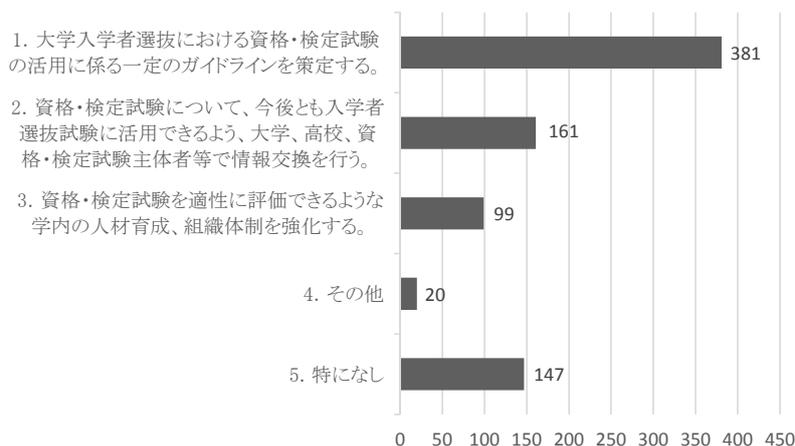


図 1.13 大学入学者選抜への活用拡大方策 (n=685 大学)

## 2 大学へのヒアリング調査

### (1) ヒアリング対象

#### ①ヒアリング対象大学

資格・検定試験を活用している都市圏と地方圏の大学の中から、複数の学科で、複数の資格・検定試験を活用している大学、また、活用に積極的な大学と消極的な大学の両方を抽出した。

- A大学（国立大学、都市圏）：推薦入試で活用している。
- B大学（公立大学、地方圏）：活用に消極的。かつて活用していたがやめた経緯あり。
- C大学（私立大学、都市圏）：複数の学科で複数の資格・検定試験を活用している。
- D大学（私立大学、都市圏）：活用に消極的。多種ある資格・検定試験を相対的に評価できないため。

#### ②主なヒアリング内容

##### 【活用している大学】

- ・活用している試験の具体的評価方法
- ・現状での効果と課題
- ・活用しやすい資格・検定試験と活用しにくい資格・検定試験の違い

##### 【活用していない大学】

- ・活用しない理由
- ・活用の可能性（何が改善されれば活用の余地があるか）

### (2) ヒアリング内容

#### ①活用している大学

##### 【資格・検定試験の能力評価の基準は何か】

##### ■ A大学

- ・大学入試センター試験の結果から学内基準に照らし合わせて学力を評価し、それに資格・検定試験の結果をプラスしており、その選考は試験結果と面接で行っている。
- ・面接時の評価基準は、学力の他に自主性があるか、リーダーシップが図れるかをヒアリングで確認し、また小論文等から段階的にランク付けしている。
- ・選考基準はあくまで学生が高い学力を持っているかどうかであり、学力から評価している。単に一芸に秀でていることは選考対象にならない。

##### ■ C大学

- ・資格をもっていることを公募推薦の条件としており、特に基準はない。
- ・基準というよりも大学は学生が資格試験を準備し、受かるまでのプロセスを大事にしている。頑張る姿勢の有無が一つの基準といえるかもしれない。
- ・なお、対象となる資格試験は高校在学中にとった場合のみ。ただし、書類審査で資格のレベルは参考にする。

## 【資格・検定試験を能力評価に活用する場合の問題点は何か】

### ■ A大学

- ・これまでで特に問題はない。入学後に学部で独自に能力をチェックしている。
- ・実用英語技能検定や実用数学技能検定、日商簿記等も1級に準じていることを条件としているため、質や信頼性は確保されている。

### ■ C大学

- ・入学後に学部ごとに能力をチェックしているが特に問題はない。経営学部では入学後にテストをしている。
- ・入試に使える資格・検定試験について受験時期を高校在学中としているのは、最近の能力を見るためである。（高校在学以前に取得した生徒について、大学入学後その能力が維持されていないケースもあった）
- ・過去に、実用英語技能検定2級の導入を止めたこともある。この時は、検定試験から入学までの期間が長かったことなどから学生の能力が低下し、大学側が期待した能力が見られなかったことが理由である。

## 【活用による効果や問題点をどのように検証しているか】

### ■ A大学

- ・資格・検定試験活用の効果や問題については検証していないが、推薦入試で入学した学生に対して学内で独自の試験を実施したり、学生がどのような役割を担って学生生活を行っているかをチェックしたりしている。
- ただし、当該学生のためだけに検証しているわけではない。担当教授からは、これまで一般入試で入学してきた学生よりも能力は高いとの報告を受けている。

### ■ C大学

- ・入学した生徒については、学科ごとに授業の中で能力をチェックしている。
- ・留学を推奨しており、学生の能力を見るためにコミュニケーション能力がチェックできるTOEFLなどを受けさせている。
- ・資格を持って入学した生徒について、入学後も効果を生み出しているかどうかチェックはできていない。
- ・活用の効果としては勉学への意欲を評価することができ、また基礎的な学力を見ることができることなどが挙げられる。

## 【新たな資格・検定試験活用の可能性について】

### ■ A大学

- ・あくまで大学入試センター試験による学力を補完するものと位置づけている。
- ・入試問題作成に対する負担を理由に、外部の資格・検定試験を活用するといった意見は出ていない。逆に結構熱心に取り組んでもらっている。
- ・将来、実用英語技能検定1級以外にも活用を拡大する可能性はある。

## ■ C大学

- ・現在の推薦入試の中で活用していくことを継続していく。新たな可能性は特にはない。
- ・将来、入試問題作成の負担を理由に、活用推進への意見が出てくることが予想される。

### 【資格・検定試験の活用を推進するための条件は何か】

## ■ A大学

- ・各資格・検定試験のレベルを判断するために、統一的尺度や換算表などがあることは望ましい。しかし、各資格試験についても特徴があり、独自性を残す必要があるのではないか。
- ・各資格・検定試験について、これまで以上に特色がわかるようにする必要がある。学生に対して、あくまで学力の有無を評価しており、資格・検定試験がそれに代わるものとは思えない。
- ・大学入試センター試験による学力プラス $\alpha$ として考えるべきと思う。

## ■ C大学

- ・経済、経営等については活用の可能はある。
- ・対象となるのは語学で、中でも受験生の選択が多い英語となる。個人的な見解として、英語などは統一した尺度で評価でき、全学部が共有できるようになれば活用の可能性が高まる。
- ・他の科目についての可能性は低い。

### 【資格・検定試験の活用を推進するために高校や資格・検定試験実施機関に期待する点は何か】

## ■ A大学

- ・推薦入試は今後も継続していくので、資格・検定試験実施機関側でも、学生の学力を担保でき、外部から学力が明確に判断できるようにしてもらいたい。

## ■ C大学

- ・高校時代に何の資格をとるために頑張ったかを見ているため、学習指導要領との整合性については、特に期待している訳ではない。
- ・資格・検定試験が多すぎる。その質や評価を判断しづらいので、それらを改善していく必要がある。

### 【資格・検定試験の活用に向けて、各試験の採用のポイントは何か】

## ■ A大学

- ・いかに学生の学力を正確に判断できるかが必要となる。できれば、制度的に担保できればよいと思う。

## ■ C大学

- ・学習指導要領よりも、生徒が自主的に何の資格をとったかを見る。
- ・高校の授業の中で強制的にとらせられる資格は、入学後にも好影響が見られない。

### 【資格・検定試験の活用の周知について】

#### ■ A大学

- ・大学からの広報だけで特に予定はしていない。推薦入試で入ってくる学生は現在年に2～3名であり、今後もそれほど増えることはないと考えている。

#### ■ C大学

- ・高校には推薦入試で活用していることを説明している。実施機関には特に行っていない。

### 【現行の選抜方法の改善策は何か】

#### ■ A大学

- ・当面現行のままでいくが、英語については他の試験を増やすことも考えている。
- ・学生にとって、入学後、本学の授業についていけるかが重要であり、あくまで学力重視の選考方法は変わらない。

#### ■ C大学

- ・入学試験問題の作成は先生たちも苦勞している。今後、語学を中心として活用の可能性はある。

## ②活用していない大学

### 【資格・検定試験を活用していない理由】

#### ■ B大学

- ・過去に活用したのが1～2回。外国人及び帰国生徒を対象として試みた。コミュニケーション能力を重視し、TOEFLを活用した。
- ・活用することを決定し実施したが、TOEFLの試験日が限定されているため、外国人や帰国生徒から試験を受けられないなどの不満が生じたため取りやめた。

#### ■ D大学

- ・これまでの選抜試験方法で特段問題ない。
- ・英語、数学等が対象となるが、各種の試験があり、それぞれがどの程度の質や信頼性を持っているのか不明。
- ・大学側が求めている能力を評価することができていない。
- ・外部試験と大学独自の試験両方を受けるとなると、生徒自身の負担が増し、費用の面でも苦勞することも予想される。
- ・学習指導要領に沿っていることは望ましいが、試験の質や信頼性を明確にすることが重要。

### 【活用を再開するための条件は何か】

#### ■ B大学

- ・試験が多すぎて何を採用したらよいか分からない。
- ・統一的に評価できる尺度があれば利用する。
- ・資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った内容になっているかどうか分からない。

## ■ D大学

- ・検定試験の質や信頼性については、英語のように複数の試験については統一された尺度が必要と思う。
- ・また学習指導要領に準じていることが望ましい。

### 【今後の活用再開の可能性について】

## ■ B大学

- ・過去に実施していたこともあり、今後受験生へ情報発信を行い、大学の方針がある程度認知されれば英語に関する外部試験の活用はありうる。

## ■ D大学

- ・獣医学部では面接、筆記試験等を行っており、活用の可能性が無いとは言えない。
- ・学部ごとに求める人材や能力が違うので問題が異なっており、入試問題作成の負担が大きく、英語など共通の尺度があれば活用の可能性がある。
- ・内部と外部の試験を併用することは無い。やるとすればどちらか一方となる。
- ・推薦入試では可能性はあるが、一般入試は難しい。
- ・入試問題作成の負担を軽減するために活用可能性はあるが、資格・検定試験の質や信頼性の面で課題があり難しい。
- ・可能性の面では学部間に違いはないが、活用しやすいのは英語、数学となる。

### 【資格・検定試験活用を推進するための条件は何か】

## ■ B大学

- ・現状で特に問題はないが、推進するという観点では、各種の資格・検定試験が、大学が求めるニーズにどのようなマッチするのかを明確にする必要がある。

## ■ D大学

- ・英語など統一した尺度で評価できるようになれば活用の可能性が高まる。
- ・民間の試験の場合セキュリティの面でも心配はあり、こうした点をクリアにしていくことが必要となる。

### 【資格・検定試験活用を推進するために高校や資格・検定試験実施機関に期待する点は何か】

## ■ B大学

- ・それぞれの試験が、学習指導要領のこの科目とリンクし、評価も可能であることを積極的に知らせていくべき。
- ・資格・検定試験の点数が、指導要領の科目や成績とどのような関係にあるかが明確になれば、学内でも検討されるのではないかと。

## ■ D大学

- ・外部試験の活用ができる場合、実施時期は夏頃になり、生徒にとって一発試験よりも複数回チャレンジできメリットがある。

## 【現行の選抜方法の改善策は何か】

### ■ B大学

- ・今のところ問題はないが、開学もない大学（6年前）であり、多様な人材を確保したいと思っており、将来、試験を活用して人材確保に対応できたらと思う。

### ■ D大学

- ・能力や適性を総合的に判断する方法は望ましいが、学部によって求める能力が異なるため、一概には言えない。学部が求める能力を客観的に評価でき、複数の試験も統一的な尺度で能力を判断できるような方法がとれば良い。

### 1 アンケート調査

#### (1) アンケート調査方法

##### ①アンケート調査対象と回収状況

調査対象の資格・検定試験実施機関 : 69 機関

##### ②調査実施時期

平成 26 年 11 月～平成 26 年 12 月

##### ③回収状況

回収状況 : 32 機関 (回収率 47%)

##### ④アンケート調査内容

- ・平成 25 年度に実施した、資格・検定試験の実施状況
- ・資格・検定試験の、大学入学選抜試験への活用状況
- ・資格・検定試験が大学入学選抜試験に活用される効果
- ・実施する資格・検定試験の活用をさらに推進する際の課題
- ・今後、資格・検定試験の活用拡大に向けての方策

#### (2) 調査結果

##### ①受験者数の多い資格・検定試験の分野

高校生も含めて受験者数が多いのは、教育・学術及び語学分野である。

##### ②資格・検定試験が測定している能力

資格・検定試験について、どのような能力を測定しているか、また大学入学選抜試験に活用されているかについて回答<sup>1)</sup>のあった試験について次表のように整理した。

---

<sup>1)</sup> 表 2.1 に紹介した実施機関及び試験名は、能力測定について回答のあった実施機関及び試験名について整理したもので、他にも活用されている試験は存在する。

表 2.1 資格・検定試験の測定している能力と大学入学選抜への活用の有無

実施機関	試験名称	評価する能力	大学入学選抜活用 ○
一般社団法人 日本溶接協会	溶接技能者評価試験	溶接の実作業の技量	
一般社団法人 日本ライフスタイル協会	リビングスタイリスト資格試験	接客・礼儀能力、小売流通の知識、住生活商品知識	
公益社団法人 日本工業英語協会	文部科学省後援工業英語能力検定	ライティング能力	
公益財団法人 日本英語検定協会	実用英語技能検定(英検)	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	○
株式会社 教育測定研究所	CASEC	リーディング、リスニング	
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEICテスト	リスニング能力・リーディング能力	○
国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部	TOEFL iBT	リーディング能力、リスニング能力、スピーキング能力、ライティング能力	○
全国語学ビジネス観光教育協会	観光英語検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「食物調理」	栄養・調理に関する専門的知識技能の能力	○
公益社団法人 全国珠算教育連盟	珠算検定試験	計算能力	
全国農業会議所	日本農業技術検定	農業の技術・技能及び知識の取得レベル	○
(一財)中央工学校生涯学習センター	トレース技能検定試験	写図・製図能力	
NPO法人 日本ニュース時事能力検定協会	ニュース時事能力検定試験	思考力・判断力、知識活用能力、課題設定能力、課題探求能力、課題解決能力、資料収集能力、資料活用能力、資料選択能力、情報収集能力、情報処理能力	○
公益財団法人 日本英語検定協会	実用英語技能検定(英検)	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	○
特定非営利活動法人 日本語検定委員会	日本語検定	日本人として必要な日本語の知識とそれを運用する能力を、敬語、文法、語彙、漢字、言葉の意味、表記の6領域と読解の面から測定する。	○
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 準2級	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能	○
一般財団法人 日本中国語検定協会	中国語検定試験	リスニング能力、リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力	
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	日本漢字能力検定	漢字運用能力	○
特定非営利活動法人 世界遺産アカデミー	世界遺産検定	今の時代を理解する力、異文化理解の能力	○
特定非営利活動法人 ハングル能力検定協会	第40回「ハングル」能力検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	
一般財団法人 日本書写技能検定協会	硬筆書写技能検定試験	硬筆書写の実技能能力、理論に関する能力。	○
公益財団法人 日本英語検定協会	TEAP	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	○
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEIC Bridge	リスニング能力・リーディング能力	○
国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部	TOEFL ITP	リーディング能力、文法能力、リスニング能力	
公益社団法人 全国珠算教育連盟	暗算検定試験	暗算能力	
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 3級以下	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能	○
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	文章読解・作成能力検定	読解能力・文章作成能力	
特定非営利活動法人 ハングル能力検定協会	第41回「ハングル」能力検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力	
一般財団法人 日本書写技能検定協会	毛筆書写技能検定試験	毛筆書写の実技能能力、理論に関する能力。	○
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEICスピーキングテスト/ライティングテスト	スピーキング能力・ライティング能力	
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 2級	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能	○
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	BJTビジネス日本語能力テスト	ビジネススキル、日本語能力	○
一般社団法人 日本ライフスタイル協会	リフォームスタイリスト資格試験	接客・礼儀能力、建築知識、法規・税制の知識	
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「被服製作」	被服に関する専門的知識・技能向上	○
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「保育」	乳幼児理解、幼児教育に関する専門的技術の向上	○

### ③大学入学選抜試験に活用されている資格・検定試験

各試験の活用状況については、表 2.2 に示すように教育・学術系では活用されているという回答が多い。

表 2.2 大学入学者選抜試験への活用状況

項目	1. 資格・検定試験は大学入学選抜に活用されている。	2. 資格・検定試験は大学入学選抜に活用されていない。	3. 資格・検定試験が大学入学選抜に活用されているかどうか分からない。	4. その他	
総数 n=65	31	11	22		1
2.インテリア n=2	0	0	2		0
3.オフィス技能 n=7	2	3	2		0
4.教育・学術 n=14	11	0	3		0
5.経営・ビジネス n=3	2	1	0		0
6.建築・建設 n=3	0	2	1		0
8.語学 n=14	5	4	4		1
10.コンピュータ n=8	5	0	3		0
11.財務・会計・金融 n=4	2	0	2		0
13.調理・衛生 n=2	2	0	0		0
14.デザイン n=1	0	0	1		0
15.電気・通信 n=1	0	1	0		0
23.その他 n=6	2	0	4		0

総数は回答があった資格・検定試験の数

### ④今後活用の可能性がある資格・検定試験

資格・検定試験の活用可能性がある分野は以下のとおりである。

- オフィス技能：硬筆書写、毛筆書写、社会常識
- 教育・学術：ジュニアマイスター
- 語学：英語能力、日本語能力
- 財務会計金融：簿記

### ⑤大学入学者選抜試験に活用される場合の効果

効果があるという回答は、表 2.3 に示すように語学系、教育・学術系、コンピューター系に多い。語学系では「入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある」という回答が多く、次いで「大学の入試業務の軽減に効果がある」「資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学者選抜の実施に効果がある」となっている。

効果の程度（「かなり効果がある」「多少効果がある」「効果は不明」）については、語学系では上記で挙げられた効果について、いずれも「かなり効果がある」という回答が多くなっている。

また、その他の効果として、「英語による科学技術論文を書ける能力が身につく」、「学力差の大きい農業高校間で農業についての勉学の修得状況が客観的に把握できる」、「高等学校の学習指導要領の「言語に関する能力の育成」の度合いが測定できる」といった意見が挙げられている。

表 2.3 大学入学者選抜試験に活用される効果

項目		1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	3. 大学は多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある。	4. 大学は自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある。	5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある。	6. 資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学者選抜の実施に効果がある。	7. 大学の入試業務の軽減に効果がある。	8. その他
実数	総数 n=54	30	9	23	8	12	16	10	7
	2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0	0	2
	3.オフィス技能 n=6	1	0	5	0	0	0	0	0
	4.教育・学術 n=6	6	2	2	2	2	2	0	2
	5.経営・ビジネス n=3	1	0	1	0	0	2	1	0
	6.建築・建設 n=3	1	0	1	1	0	2	0	0
	8.語学 n=16	12	2	4	2	4	7	8	3
	10.コンピューター n=5	1	3	4	0	3	2	0	0
	11.財務・会計・金融 n=4	4	0	1	0	0	1	0	0
	13.調理・衛生 n=2	2	1	0	1	1	0	0	0
	23.その他 n=7	2	1	5	2	2	0	1	0

総数は回答があった資格・検定試験の数

## ⑥大学入学者選抜試験に活用する場合の課題

活用する場合の課題について、語学系では表 2.4 に示すように「資格・検定試験が測定する能力と、高等学校の学習指導要領との対応が困難」という回答が多く、次いで「大学側が大学入学者選抜に資格・検定試験を活用する際、その資格・検定試験にどのような能力を期待して活用しているのか不明」となっている。

課題の程度（「かなり課題がある」「多少課題がある」「課題は不明」）については、語学系は、上記で挙げられた課題について、いずれも「かなり課題がある」という回答が多くなっている。

表 2.4 大学入学者選抜試験に活用する場合の課題

項目		1. 資格・検定試験の成績の提示方法により、同じ成績でも評価した能力に一定の差がある。	2. 資格・検定試験が測定する能力と、高等学校の学習指導要領との対応が困難。	3. 大学側が大学入学者選抜に資格・検定試験を活用する際、その資格・検定試験にどのような能力を期待して活用しているのか不明。	4. 資格・検定試験で測られた能力が大学入学者選抜において適正に評価されているか不明。	5. 受験生の経済的負担が増える。	6. その他
実数	総数 n=62	1	10	20	12	6	8
	2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0
	3.オフィス技能 n=7	0	0	4	0	0	0
	4.教育・学術 n=14	1	0	2	3	2	1
	5.経営・ビジネス n=3	0	1	0	0	0	0
	6.建築・建設 n=3	0	0	1	0	0	0
	8.語学 n=13	0	7	3	2	2	5
	10.コンピュータ n=8	0	0	6	3	1	1
	11.財務・会計・金融 n=4	0	0	3	0	0	1
	13.調理・衛生 n=2	0	0	0	2	1	0
	14.デザイン n=1	0	0	1	0	0	0
	15.電気・通信 n=1	0	0	0	0	0	0
	23.その他 n=4	0	2	0	2	0	0

総数は回答があった資格・検定試験の数

## ⑦資格・検定試験の質<sup>1)</sup>の担保

各実施機関では、質の担保について次のような考えを持っており、専門機関による検証により質の担保を図っているケースが多い。

- ・資格取得者を活用する業界の意見の反映、及び中立公平な外部有識者で構成する試験制度運営委員会によって検証を行う。
- ・外部テスト専門機関と協業で問題の質的・量的分析を行う。新形式アイテムの研究開発を行う。
- ・面接委員や採点者の質担保のためのオンライントレーニングや、採点時のオンライン上でのモニタリングを行う。
- ・各問題の解答データを収集し、統計的な観点から問題の質や試験の信頼性と妥当性を担保する。
- ・校長を委員長とし、大学教授に監修を依頼し、全国から選抜された教員により作問や評価方法の研究を継続する。
- ・各都道府県検定代表理事制度を活用し、毎年実技講習会や評価講習会を実施し、評価の公平性と精度を高めている。
- ・検定問題は学習指導要領に一定程度従いつつ、問題作成委員会を設置して、小学生、中学生、高校生、大学生の学習内容に精通した専門家が作成している。
- ・検定問題の質については、シンクタンクから意見を求めている。また内部で正答率や解答を分析し、質の向上に努めている。また採点については多重採点を行い、記述式の利点を生かした質の確保を行っている（別解答の評価・部分点の評価・不正行為の検査）。
- ・他団体が実施している同種の検定試験との内容の比較点検を定期的に行う。検定試験のレベルを細分化し（10級～1級、さらに段位検定まで個別の問題を提供）、技能の高低が分かり易くなっている。

---

<sup>1)</sup> 資格・検定試験の質：本調査では、資格・検定試験の質を、実施機関の実施能力、継続性、自己評価能力、試験内容の社会的信頼性により構成されるものとして定義した。

## ⑧大学入学者選抜試験に活用するための方策

資格・検定試験を大学入学者選抜に活用していくためには、図 2.1 に示すように「大学が求める学力水準を判定するための参考資料として、学力試験と併用して資格・検定試験の活用を進める」という回答が多く、次いで「資格・検定試験について、今後とも大学入学者選抜試験に活用できるよう、大学、高校等と情報交換を行う」となっている。

その他意見として、大学のアドミッションポリシーに照らし合わせていくとの回答が挙げられている。

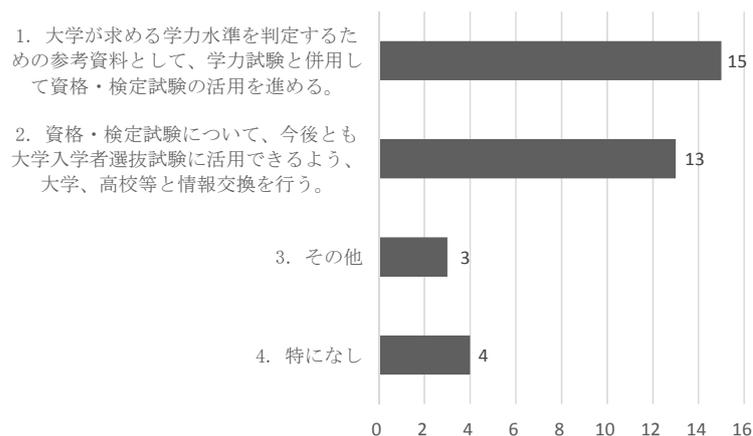


図 2.1 大学入学者選抜に活用していく方策 (n=32 機関)

## 2 資格・検定試験実施機関へのヒアリング調査

### (1) ヒアリング対象

#### ①ヒアリング対象実施機関

大学での活用が多い試験を扱っている実施機関であり、受験者数の多い実施機関を抽出した。また、現在活用実績は少ないが、今後活用の増加が期待できる実施機関を抽出した。

○E機関(語学分野)：大学での活用が多く、受験者数も多い。

○F機関(数理分野)：高卒認定試験において代替可能、大学での活用が多く受験者数も多い。今後の活用増が期待される。

○G機関(経済・経営分野)：大学での活用が多く、受験者数も多い。

#### ②主なヒアリング内容

- ・測定している能力
- ・大学入試に活用する有効性と課題
- ・よく利用されている資格・検定試験(大学での活用が多い試験を扱っている実施機関)
- ・学習指導要領との関係について分析しているか(していれば分析の内容)
- ・大学入試への活用をさらに促進するために、資格・検定機関が努力できること

### (2) 主なヒアリング内容

#### 【資格・検定試験の活用の効果をどのように検証しているか】

##### ■ E機関

- ・大学側で実施しているので、実施機関としては特に何かを実施しているわけではない。大学関係者にヒアリング調査をし、協会としての活用に対する検討案を示している。
- ・大学側に英語能力判定テストを提供し、クラス分けなどに活用してもらっている。

##### ■ F機関

- ・大学で活用してもらっており、効果がでている。

##### ■ G機関

- ・入試に関しては、大学側や高校側担当者と情報交換を行っている。

#### 【資格・検定試験の活用を推進する上での問題点や課題は何か】

##### ■ E機関

- ・英語に関する試験は数多く存在し、それぞれに活用されているが、大学側にとって質や信頼性が問われている。一定の統一尺度で各試験を評価することが必要と感じており、その検討案を用意している。
- ・作成した問題が学習指導要領にそっているか、4技能についてどこまで対応できているかを重視している。
- ・資格・検定試験のスコアが、学習指導要領が必要とする英語力にどのように関係しているかを検証していないので、今後これらの関係性を明らかにしていかなければならない。
- ・学習指導要領にはほぼ沿っており、特に問題はないと思っている。

### 【資格・検定試験の活用を推進するための条件は何か】

#### ■ E 機関

- ・ 4 技能への対応、質や信頼への不安を解消するために、共通の尺度で評価できる仕組みを提供することが必要となる。

#### ■ F 機関

- ・ 資格試験の認識を広げなければならない。認識を広げるための努力を実施機関側もしなければいけない。

#### ■ G 機関

- ・ 基本は学習指導要領に逸脱せずに問題が作られているかだと思う。

### 【資格・検定試験活用を推進するために高校や大学に期待する点は何か】

#### ■ E 機関

- ・ ヨーロッパの状況を参考に共通尺度を検討した。既に国内大学でも共通尺度を採用する大学も出てきている。
- ・ 大学側への要望として、専門的な職員に権限を委譲し、その職員を中心に選抜方法を検討し、資格・検定試験の活用を検討してもらいたい。

#### ■ F 機関

- ・ グローバルな人材を求めている大学は多いが、英語能力だけではなく、数理的能力がグローバルな人材を創りあげることも認知してほしい。

### 【外部への周知について】

#### ■ E 機関

- ・ 共通尺度を普及させるために、専門家にも納得してもらうような設計を行い、大学側と定期的な意見交換を持ちながら周知していきたい。

#### ■ F 機関

- ・ 資格・検定試験が高校や大学、短大、専門学校における入試や単位認定に採用されていることを冊子にし、現場サイドに送付している。

#### ■ G 機関

- ・ 検定試験を活用してもらっている大学名を、ホームページやパンフレットに載せPRに使っている。

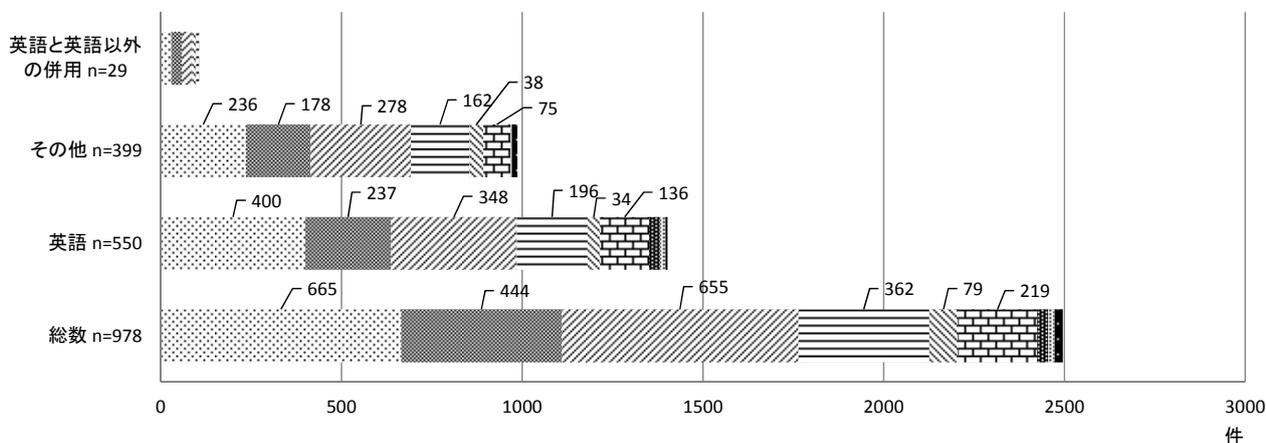
1 資格・検定試験の活用の効果

(1) 入学者の能力評価に関して

大学へのアンケート調査結果からは、図 3.1 に示すように、英語の資格検定試験の活用は「入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある」という回答が最も多い。

英語以外のその他では、「多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある」という回答が多くなっている。

英語では、学生の能力（学力）評価に重点を置いており、英語以外のその他ではそれぞれの資格検定試験の特色を踏まえて、多様な能力の有無を評価することに重点を置いていることが理解される。



- 1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
- 2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
- ▽3. 多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある
- △4. 自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある
- ◇5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある
- 6. 資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学者選抜の実施に効果がある
- 7. 入試業務の軽減に効果がある
- 8. その他
- 無回答

図 3.1 資格・検定試験を活用することの効果 (n=978 学部)

## 2 資格・検定試験の活用の課題

アンケート調査やヒアリング調査から、資格・検定試験の活用に関して大学側が課題としている点を整理した。

### (1) 資格・検定試験の質が不明

大学へのアンケート調査では、資格・検定試験を活用していない理由として、「これまでの選抜試験方法で特段問題ない」という回答が多く、次いで「資格・検定試験で測られる能力（知識、技能等）が大学教育で求められる能力に対応したものか分からない」という回答も多く、活用していると回答した大学でも、活用上の課題として「大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない」、「資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している」といった回答が多くなっている。

大学へのヒアリング調査からも、資格・検定試験を客観的に評価する基準や仕組み、また関連する他の試験との相違点や点数の換算方法が判断しにくいことなどが挙げられている（前掲のA大学、D大学）。

表 3.1 は資格・検定試験を活用していない理由を示したものである。これによると「資格・検定試験で測られる能力（知識、技能等）が、大学教育で求められる能力に対応したものか分からない」という回答が、回答総数 685 大学の内、80 大学（12%）となっており、大学としては、資格・検定試験で測られる能力が、学生が今後学部や大学院等で学んでいくための能力に、対応できているのかどうか判断しにくいという状況にあると考えられる。

表 3.1 大学別資格・検定試験を活用していない理由

種別	国立大	公立大	公立短大	私立大	私立短大
回答総数	71	60	6	356	192
「資格・検定試験で測られる能力（知識、技能等）が大学教育で求められる能力に対応したものかわからない」を選択した大学数（n=80）	14	9	2	27	28
割合	19.7%	15.0%	33.3%	7.6%	14.6%

## (2) 資格・検定試験の認知度の低さ

アンケート調査からは英語の資格・検定試験の活用が多く、活用に当たって能力が評価しやすいという回答が多くなっているが、一方、英語以外の資格・検定試験分野の活用状況は低い。これは英語以外の分野ではそれぞれの資格・検定試験の特色を踏まえて、多様な能力の有無を評価することに重点を置いていると考えられることから、英語以外の分野では大学側が求める学生の学力を判定することが困難という判断から、英語に比べて認知度が低くなっていると考えられる。

大学へのヒアリング調査からも、英語以外では資格・検定試験の実施主体が様々であることから、その内容が理解しにくいという意見が挙げられている（前掲のB大学、D大学）。

## (3) 学習指導要領との対応性が不明確

大学へのアンケート調査結果からは、学部全体での活用に対する課題の中で、資格・検定試験が学習指導要領に沿った内容となっていないので選定が困難という回答が、978件中75件となっている。英語に関しては550件中20件、英語以外その他では399件中35件、また英語と英語以外の併用では29件中20件となっている（表3.2参照）。

「資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った試験内容となっている」という回答が多いのは、語学系では「実用英語技能検定」や「TOEFL」等が多く、英語以外のその他では情報処理や簿記が多くなっている。学部別に見ると、資格・検定試験を活用する上で、「資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った試験内容となっている」という回答は、社会科学、家政、人文科学、教育系分野である。

次に、試験実施機関へのアンケート調査では、活用をさらに推進する際の課題として「資格・検定試験が測定する能力と、高等学校の学習指導要領との対応が困難」という回答が、回答全体62件中10件となっている（表3.3参照）。

一方、学習指導要領について直接ふれてはいないが、「高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある」という回答については、大学側では学部全体で978件中79件あり、英語については550件中34件、英語以外では399件中38件となっている（前掲図1.8参照）。

同様に実施機関側では、回答全体54件中12件あり、その内語学系が4件となっている（前掲表2.3参照）。

以上のように、学習指導要領との対応性の有無を重視する割合はそれほど多くない。しかしながら高等学校教育と大学教育との円滑な接続を評価する回答や、特定の教科・科目についての能力評価等を認める回答も見られることから、資格・検定試験は高等学校教育の成果を測るものとして認識されていると考えられる。

表 3.2 資格・検定試験を活用する上での課題（大学用アンケート調査）

課 題		1. 資格・検定試験を活用して入学した学生について、資格・検定の修得により評価した能力にばらつきが見られ、一概に効果を見いだしにくい	2. 資格・検定試験の中には、高等学校の学習指導要領に沿った内容となっていないものがあり、選定が困難	3. 大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない	4. 資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している	5. 受験生の経済的負担が増える	6. 資格・検定試験の質や信頼性が担保されているかどうかの問題がある	7. その他
実数	総数 n=978	194	75	341	290	50	150	99
	英語 n=550	108	20	191	182	39	66	71
	その他 n=399	85	35	126	104	11	64	28
	英語と英語以外の併用 n=29	1	20	24	4	0	20	0

表 3.3 資格・検定試験を活用する上での課題（実施機関用アンケート調査）

項 目		1. 資格・検定試験の成績の提示方法により、同じ成績でも評価した能力に一定の差がある。	2. 資格・検定試験が測定する能力と、高等学校の学習指導要領との対応が困難。	3. 大学側が大学入学者選抜に資格・検定試験を活用する際、その資格・検定試験にどのような能力を期待して活用しているのか不明。	4. 資格・検定試験で測られた能力が大学入学者選抜において適正に評価されているか不明。	5. 受験生の経済的負担が増える。	6. その他
実数	総数 n=62	1	10	20	12	6	8
	2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0
	3.オフィス技能 n=7	0	0	4	0	0	0
	4.教育・学術 n=14	1	0	2	3	2	1
	5.経営・ビジネス n=3	0	1	0	0	0	0
	6.建築・建設 n=3	0	0	1	0	0	0
	8.語学 n=13	0	7	3	2	2	5
	10.コンピュータ n=8	0	0	6	3	1	1
	11.財務・会計・金融 n=4	0	0	3	0	0	1
	13.調理・衛生 n=2	0	0	0	2	1	0
	14.デザイン n=1	0	0	1	0	0	0
	15.電気・通信 n=1	0	0	0	0	0	0
	23.その他 n=4	0	2	0	2	0	0

アンケート調査結果、ヒアリング調査及び検討委員会からの助言を踏まえて、大学が課題としている点を解決し、さらに資格・検定試験の大学入学者選抜への活用を普及・拡大していくための方策を整理した。

整理するに当たり、英語は能力や学力等を比較的容易に評価することができることから、大学入学者選抜への活用が進んでいる。一方、英語以外の一部の資格・検定試験は、多様な能力を有した学生を確保する点で活用されているが、英語に比べると活用の度合いは低い。

こうした状況を踏まえて、必要に応じて英語とそれ以外に分けて方策を整理することとした。

### 1 資格・検定試験の質の担保

アンケート調査やヒアリング調査結果の、資格・検定試験活用の理由に挙げられているように、資格・検定試験の内、英語や簿記、数学など特定の教科・科目の能力については、大学が求める能力の有無を判断する材料としてある程度認められている。

しかし、一部の大学では資格・検定試験の質が不明であることから、例えば英語については、現在実施されている大学入学者選抜における英文の理解や、語法・文法などの言語に関する知識を問う問題を中心に、「読むこと」又は「聞くこと」の2技能だけを評価している。

また、英語以外のその他の資格・検定試験の多くは測定する能力が十分に理解されず、その質が不明であるとされている。

資格・検定試験の質を担保することについては、実施機関側でもこれまでの試験結果について、統計的な観点から問題点や信頼性等について検証を行ってきたが、アンケート調査結果で示されたように、一部の資格・検定試験を除いて多くは学力の評価が不明であり、大学側が必要としている能力のある学生を確保するために、どのような資格・検定試験を活用すれば有効かどうか判断できないという状況にある。

資格・検定試験制度について、信頼できる客観的な評価基準を作るべきなどの意見も挙げられていることから、今後とも実施機関側の体制を強化し、試験の特色を明確にしながら能力や評価基準等の検証を徹底させ、質を向上させることを検討していくことが必要と考えられる。

## 2 資格・検定試験の認知度を高める

資格・検定試験の認知度が低いことについては、実施機関と大学間の情報共有が不足し、相互のニーズやシーズに関する情報交換が十分に成されてこなかったことが、要因の一つとして考えられている。

資格・検定試験の特色、能力、コンセプトが不明であることに対して、実施機関側でも業界ごとにホームページ上で各試験の特色や評価する能力を解説したり、大学や企業等での活用実績を紹介したり、大学と実施機関との交流会等を開催するなどして、大学側からの要望を把握しつつ、各資格・検定試験の認知度向上に取り組んできている。また情報発信についても業界ごとの取組を一元化し、共通のプラットフォームづくりができないかということも検討されている。

今後とも引き続き、ホームページや機関誌等の利用、大学、高校、実施機関等による情報交換会を利用して情報提供を行い、大学や高校側への認知度を高めていく必要がある。

各資格・検定試験にはそれぞれに目的やねらい、能力などの特徴があるが、アンケート調査やヒアリング調査に見られるように、大学側ではどのように資格・検定試験の結果を利用したらよいのか、どう解釈したらよいのかよく解らないという意見が寄せられている。

実施機関としては、この試験がどういう目的でどういうコンセプトで作られたか、その仕組みを整理すると共に、資格・検定試験がどのような能力を評価できるのか、学習指導要領とどの項目でどのように対応できているのかなどを図上にマッピングし、それぞれの特徴を認知させていくことが必要である。

特に英語のマッピングに当たっては、「読む」と「書く」ことの2技能を重視している大学があることから、学習指導要領に沿って4技能を重視しているものと2技能を重視しているものを分類して作成しなければならない。

こうして作成されたマッピングをもとに、大学、高校、実施機関等が

相互に、この領域に位置づけられる資格・検定試験はこの大学のこの学部、学科が求めている基準に対応可能、また、この領域にあるものは対応が困難といったことを理解できることになる。

マッピング作業に向けては、大学と実施機関、また高校等も参加した研究会を設け、議論を重ねていくことが必要であり今後の課題となる。

英語の資格・検定試験では既に検討されているが、関係する試験を共通尺度で相互に比較可能なものにする 것도、資格・検定試験の認知度を高めることにつながる。

どのような資格・検定試験が大学入学者選抜に活用できるかを検討している大学にとっても、資格・検定試験活用の選択の幅を広げることにつながると考えられる。

一方、資格・検定試験はそれぞれが独自の目的を持ちコンセプトも異なることから、これらの特色づくりが今後明確になっていけばいくほど、横並びに比較検討することが困難となることも予想される。

こうしたことから、共通尺度については各資格・検定試験の目的や活用する対象範囲を明確にした資格マップを作成するなど、きめ細かに共通尺度を検討していかなければならない。

### 3 学習指導要領との対応を明確にする

英語を中心とする語学系の資格検定試験を大学入学者選抜に活用する場合、学習指導要領との対応性が必要とされていることから、一部の実施機関へ対応状況の調査を行った。

それによると、実用英語技能検定や TEAP についてはコミュニケーション分野<sup>1)</sup>は学習指導要領と対応している。実用英語技能検定では話し合ったり、意見交換をしたりすることなどは、1 級に限定されているということであった。暗唱や音読等は含まれていない。

また、表現分野<sup>2)</sup>も学習指導要領に対応しているが、意見を述べ合うことは1 級に限定されている。会話分野<sup>3)</sup>は学習指導要領と対応している、という回答であった。

TOEFL や観光英語については全分野で対応しているという回答が寄せられた。

中国語については、コミュニケーション分野では聞くこと、読むこと、書くことは対応しているが、話すことについては日常会話程度を求めており、他の語学と比較すると対応状況は低くなっている。また、表現や会話分野についても与えられた課題に対して説明できるかどうかを見る程度という回答であった。

このように、英語を中心とする語学系は他の分野の試験と比べて、学習指導要領との対応が進んでいると言われているが、一方で問題も出てきている。

それは学習指導要領に記載されている学習場面（教室）での指導の在り方や、課題設定の在り方について、資格・検定試験との対応性に相違点が生じていることである。

学習指導要領では、「主題を決め様々な種類の文章を書く」と記載されているが、資格・検定試験の場では、受験者に対して決められた課題を提示することになり、受験者が自由に主題を決めることはできない。また、学習指導要領では「相手に質問したり相手の質問に答えたりする」と記載されているが、質問する課題については TEAP にはあるが、実用英語技能検定ではない。

また、実施機関側も、資格・検定試験が学習指導要領との対応性を確保しているという状況であっても、その対応の度合いについてどの程度厳密さが求められるのか、試験の級について個別にどのように対応したらよいかという課題が残っている。

現在、全国の多くの高等学校で、校長の判断で「学校外における学修の単位認定制度」を設け高等学校の単位として認定している。今後、これらの実績を踏まえて高校生の学力と資格・検定試験との相関性を分析することで、資格・検定試験が高校での学習成果を評価できる試験として位置づけられる可能性もある。

以上の点から、資格・検定試験の大学入学者選抜への活用促進に向けて、まず英語とそれ以外についてそれぞれの特色を活かしつつ、学習指導要領と積極的に対応させる試験と、そうする必要のない試験とに分類する。前者については英語の4技能を中心として大学が期待する能力（学力）に対して、どの資格・検定試験のどの級が学習指導要領のどの項目にどの程度一致するのかを明確にし、それらが理解できるようにマッピングしていくことが必要と考えられる。

1) コミュニケーション分野：具体的な言語の使用場面を設定して、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえ、話し合ったり意見交換を行ったり簡潔に書いたりする。

2) 表現分野：具体的な言語の使用場面を設定して、与えられた話題について即興で話したり書いたり発表したりする。

3) 会話分野：具体的な言語の使用場面を設定して、相手の話を聞いて理解するとともに、場面や目的に応じて応答したり、質問したり、答えたりする。

資格・検定試験の大学入学者選抜への活用を推進していくために、学習指導要領との対応性について今後とも検討していかなければならない課題と考えられる。

#### 4 大学のアドミッションポリシーの提示

資格・検定試験の活用を推進するには、大学側は大学としてどのような能力を持った学生を受け入れたいのか、入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)を明確にすることも必要と思われる。これによって大学入学者選別試験にどのような能力を必要とし、どのような資格・検定試験が活用できるかを、高校や資格・検定実施機関側に示していくことが可能になると考えられる。

実施機関へのアンケート調査やヒアリング調査からも、大学側が大学入学者選抜に資格・検定試験を活用する際、その資格・検定試験にどのような能力を期待して活用しているのか不明との意見も出ており、相互の情報共有が十分にできていない状況が読み取れる。

こうした状況を改善するために、これまで以上に大学側からのアドミッション・ポリシーを明確にし、実施機関や高校側に情報発信することも有効になると考えられる。

同時に、大学内においても、学生を獲得するに当たっては専門的な組織を構築し、各資格・検定試験が持っている特性を理解し、どのような試験のどのような能力が自大学が求める能力にマッチするかを検討するなど、資格・検定試験の活用に向けた研修実施も必要と考えられる。

#### 5 大学入学者選抜への資格・検定試験活用に係るガイドラインの策定

各資格・検定試験には、既に英語検定や漢字検定及び数学検定などのように、大学入学者選抜に活用されており、今後も活用が期待されているもの(語学系、数学系、経済経営学系、情報系等)と、大学が求める学力を評価しにくく活用が進まないものがある。これらを分類し活用に当たってのガイドラインを示すことも必要と考えられる(図4.1参照)。

ガイドラインの中では、前者の活用が期待されているものについては、第1に各資格・検定試験(級を含む)が測定しようとしている能力やその評価基準、関連する試験との比較(共通尺度を提示するなど)を明記し、それらが学習指導要領とどの程度対応しているのかを明確にすることが必要となる。

特に英語については、各試験について4技能がどのように作問されているか、語彙レベルや主題意図を明らかにする必要がある。

第2に、大学に対して科目によっては大学入試センター試験を採用するか資格・検定試験を採用するのか、あるいは併用するのか、大学のニーズに応じた多様な選択方法が可能であることを示していくことも必要と考える。

これによって大学入試センター試験と資格・検定試験の組合せが可能となり、資格・検定試験での受験が可能となれば、受験生への経済的負担を軽減させ、選択の幅も広がるなど多少の助けにもなる。

何と何を組み合わせるかは今後も十分に議論していかなければならない点であるが、以上のような情報提供や活用手順等を整理するなど、大学側が大学入学者選抜に外部試験を導入しようとする際に、手引きとなるようなガイドラインを策定しておくことが必要と考えられる。

一方、後者の大学が求める学力を評価しにくいものについては、アンケート調査の活用の上での効果に見られた、「入学者の能力や多様な能力を持った学生を受け入れることができる」（前掲図 1.7 参照）のように、資格・検定試験を活用することで大学は特定の能力に秀でた学生を確保することも可能となる。こうしたことから、ガイドラインでは各資格・検定試験が測定しようとしている能力や社会における実績などの特色を明確にし、大学が求める学生像や必要とする能力と、資格・検定試験で測れる能力とを対比できるような、マトリクス図を記載していくことが考えられる。

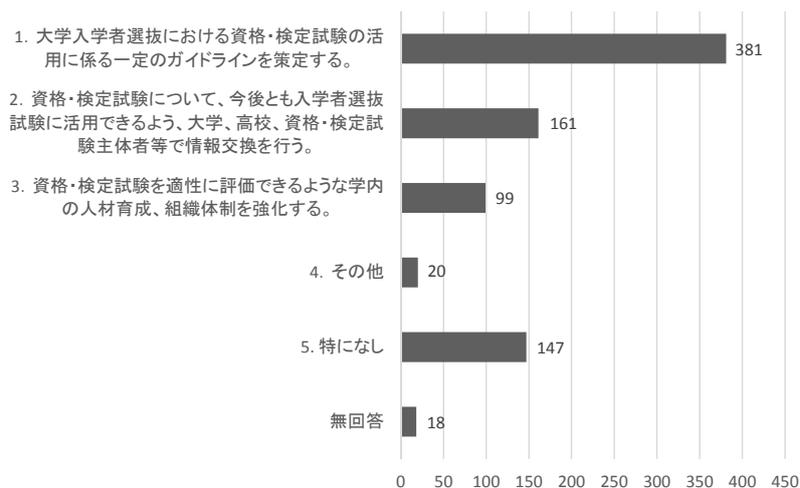


図 4.1 資格・検定試験の活用拡大策(n=685 大学)

## 6 大学、高校、実施機関による資格・検定試験活用の情報交換

アンケート調査及びヒアリング調査からは、資格・検定試験について実施する関係機関の情報共有を求める声があることから、今後とも資格・検定試験を大学入学者選抜に活用できるよう、大学、高校、資格・検定試験実施者、専門家等で情報交換を行う場を設け、各試験についてその特色や評価する能力等を大学に理解してもらう取組が必要である。

学習指導要領についても前掲の「学校外における学修の単位認定制度」の活用結果を検証し（相関性を分析）、情報交換の場を利用して分析結果を大学に発進していくことも考えられる。

こうした取組は資格・検定試験と学習指導要領との親和性を確保することにつながり、高大接続にも寄与する。なによりも学習指導要領との対応性を課題としてあげている大学や実施機関の問題意識を緩和することが可能になると考えられる。

高等学校教育と大学教育との円滑な接続性が求められていることから、まず英語、簿記関係を中心に、資格・検定試験の特色や能力、学習指導要領との対応性などについて情報交換をしていくことが必要と考えられる。

## 7 大学が求める学力と資格・検定試験の学力との関係性を明確化

大学で求められる学力と資格・検定試験での学力とはそれぞれに目的が異なる。高校での学力は習熟度を判定するものであり、大学が求める学力は知的探究心や創造的な研究開発能力の有無など、学生の大学生活での成長の可能性を判定するものである。

したがって、資格・検定試験の大学入学者選抜への活用を推進するには、両者の学力がどの程度相関性があるのかを分析し明らかにすることも必要であろう。

既に某大学でも英語に関する試験について相関性を分析しているが、試験の対象者をどのように確保するのか、学生が入学した後、どの程度の期間で実施すれば有意な結果が得られるのか、また分析方法をどう明確化するのかなど多くの課題が残っている。

まず英語を対象として、大学入試センター試験と資格・検定試験を受けた学生を対象に、学力の関係性を分析することを想定し、専門家による委員会を設置してモデル校の選定や調査時期、分析方法などを検討するなど試験的に取り組むことが必要と考えられる。

## 8 暫定的に大学入学後の学生の能力評価に資格・検定試験の活用を導入

アンケート調査及びヒアリング調査からは、資格・検定試験（特に英語や数学等）は、学生たちの大学入学後の能力評価に活用され、その効果が認識されているケースが報告されている。

資格・検定試験の特色やどのような能力を評価できるのかを大学側に認識してもらうために、暫定的な試みではあるが、語学系の資格・検定試験については、大学側のニーズに対応しながら問題内容や評価基準等の在り方を検討し、大学入学後の能力別クラス分けに活用したり、また、その他特定の科目については学期末の試験などにも活用したりして、学生の履修結果を判断する取組を検討していくことも必要と考えられる。



## 主なアンケート調査結果：大学用

注) 問1は、各大学の選抜試験受験者総数及び入学者総数を聞いたもので省略している。

問2 貴学における平成26年度大学入学者選抜試験において、資格・検定試験の結果を活用した学部はありますか。

表 資格・検定試験の活用状況

項目	1. ある。	2. ない。	3. 平成27年度から実施を予定	4. 今後活用することを検討	5. その他
回答数	238	370	25	23	41

問3 問2で活用した学部があると回答した場合、どのような学部ですか。

表 学部別資格・検定試験結果活用(n=978)

	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	
項目	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	保健	商船	家政	教育	芸術	その他	不明
実数	196	295	48	122	24	54	0	36	55	16	52	80
割合	20.0%	30.2%	4.9%	12.5%	2.5%	5.5%	0.0%	3.7%	5.6%	1.6%	5.3%	8.2%

問4 問3で回答した学部、学科、及び活用した資格・検定試験について、その入試区分と活用した理由について、下記の該当する項目を選び、その番号を「入試に活用した理由」欄に御記入してください

表 入試区分別活用理由

項目	1. 資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った試験内容となっている。	2. 特定の教科・科目について、能力を評価することができる。	3. 特定の教科・科目について、勉学への意欲を評価することができる。	4. 特定の教科・科目について、入学後に履修する科目に対する適性を評価することができる。	5. 資格・検定試験の活用は、高等学校の段階における学習の達成度を把握することに役立つ。	6. 他の同種の試験より廉価だったため。	7. その他	無回答	
	実数	総数 n=978	44	482	318	160	198	0	56
	人文科学 =196	7	94	44	42	43	0	12	77
	社会科学 n=295	18	171	107	60	66	0	12	94
	理学 n=48	0	11	6	5	3	0	2	34
	工学 n=122	6	66	37	15	14	0	3	47
	農学 n=24	3	15	12	3	6	0	2	7
	保健 n=54	1	16	20	3	13	0	9	23
	家政 n=36	1	17	21	4	8	0	2	6
	教育 n=55	3	25	24	3	15	0	3	12
	芸術 n=16	0	5	5	1	0	0	1	10
	その他 n=52	4	25	16	9	10	0	3	17
	不明 n=80	1	37	26	15	20	0	7	34

表 入試区分別活用数

項目	1.一般入試	2.推薦入試	3.AO入試	無回答	
	実数	総数 n=978	27	318	154
	人文科学 =196	4	50	38	104
	社会科学 n=295	3	115	49	128
	理学 n=48	1	5	4	38
	工学 n=122	0	40	22	60
	農学 n=24	0	12	4	8
	保健 n=54	3	20	4	27
	家政 n=36	5	15	7	9
	教育 n=55	4	21	6	24
	芸術 n=16	1	2	0	13
	その他 n=52	4	14	10	24
	不明 n=80	2	24	10	44

問5 平成26年度大学入学者選抜試験において、資格・検定試験の活用による大学入学者数は何人ですか。

表 平成26年度資格検定試験の活用による大学入学者数

学部中分類番号	資格・検定試験を活用した入学者数(人)	学部中分類番号	資格・検定試験を活用した入学者数(人)
100 人文科学	4	603 歯学(進学課程)	16
101 文学関係	517	604 歯学(専門課程)	4
102 史学関係	3	605 薬学関係	12
103 哲学関係	48	606 看護学関係	33
104 その他	459	607 医学専門学群(1,2年)	0
200 社会科学	12	608 医学専門学群(3~6年)	0
201 法学・政治学関係	197	609 その他	7
202 商学・経済学関係	1,970	700 商船	0
203 社会学関係(社会事業関係を含む)	42	701 商船学関係	0
204 その他	116	800 家政	0
300 理学	0	801 家政学関係	6
301 数学関係	0	802 食物学関係	18
302 物理学関係	3	803 被服学関係	0
303 化学関係	2	804 住居学関係	0
304 生物関係	1	805 児童学関係	0
305 地学関係	0	900 教育	6
306 その他	12	901 教育学関係	8
400 工学	75	902 小学校課程	0
401 機械工学関係	10	904 中学校課程	1
402 電気通信工学関係	48	905 高等学校課程/特別教科課程	0
403 土木建築工学関係	3	906 盲学校課程	0
404 応用化学関係	1	907 聾学校課程	0
405 応用理学関係	0	908 中等教育学校課程	0
406 原子力工学関係	0	909 養護学校課程	1
407 鉱山学関係	0	910 幼稚園課程	15
408 金属工学関係	0	911 体育学関係	3
409 繊維工学関係	0	912 体育専門学群	0
410 船舶工学関係	0	913 障害児教育課程	0
411 航空工学関係	0	914 その他	12
412 経営工学関係	0	1000 芸術	0
413 工芸学関係	4	1001 美術関係	0
414 その他	8	1002 デザイン関係	4
500 農学	0	1003 音楽関係	3
501 農学関係	0	1004 芸術専門学群	0
502 農芸化学関係	0	1005 その他	18
503 農業工学関係	0	1100 その他	0
504 農業経済学関係	0	1101 教養学関係	3
505 林学関係/林産学関係	0	1102 総合科学関係	0
506 獣医学畜産学関係	5	1103 教養課程(文科)	0
507 水産学関係	0	1104 教養課程(理科)	0
508 その他	28	1105 教養課程(その他)	3
600 保健	0	1106 人文・社会科学関係	139
601 医学(進学課程)	0	1107 国際関係学(国際関係学部)関係	924
602 医学(専門課程)	3	1108 人間関係科学関係	4
		1109 その他	341
合計		5,152	

問6 大学入学者選抜試験（一般入試、推薦入試、AO入試）において、資格・検定試験結果をどのように活用していますか。

表 学部別入試区分別活用内容

	活用内容 資格・検定試験	1. 一定以上の成績又は資格取得を出席時の必要条件として採用する。	2. 資格・検定試験の成績を、個別試験の点数に加算する。	3. 合否の判定が必要となった時に参考とする。	4. その他	無回答	n
		実数	総数 n=978	377	245	62	171
	英語 n=550	206	156	36	103	49	550
	その他 n=399	148	88	26	68	69	399
	英語と英語以外の併用 n=29	23	1	0	0	5	29

問7 貴学が大学入学者選抜試験に、資格・検定試験を活用するようになったのはいつ頃からですか。

表 学部別資格・検定試験活用時期

	活用時期 入試区分	1. 平成26年度入試から活用開始	2. 平成23年度入試～平成25年度入試の間から活用開始	3. 平成18年度入試～平成22年度入試の間から活用開始	4. 平成18年度入試以前から活用開始	5. 時期は分からない
		人文科学	1.一般入試	0	3	4
	2.推薦入試	2	13	29	121	12
	3.AO入試	6	35	36	11	52
社会科学	1.一般入試	1	3	6	17	0
	2.推薦入試	17	41	103	426	69
	3.AO入試	10	32	81	26	39
理学	1.一般入試	0	3	3	0	0
	2.推薦入試	0	0	0	7	0
	3.AO入試	0	4	0	2	5
工学	1.一般入試	0	0	0	1	0
	2.推薦入試	10	4	1	49	20
	3.AO入試	0	15	11	47	0
農学	1.一般入試	0	0	0	0	0
	2.推薦入試	0	0	1	24	2
	3.AO入試	0	1	1	0	0
保健	1.一般入試	0	3	0	9	0
	2.推薦入試	36	11	4	76	14
	3.AO入試	1	0	1	5	3
家政	1.一般入試	0	4	0	10	0
	2.推薦入試	0	3	8	23	8
	3.AO入試	0	2	0	0	5
教育	1.一般入試	0	3	0	10	0
	2.推薦入試	0	4	25	41	28
	3.AO入試	0	4	9	6	0
芸術	1.一般入試	0	2	0	0	0
	2.推薦入試	16	2	1	3	0
	3.AO入試	0	1	1	1	0
その他	1.一般入試	1	2	11	6	0
	2.推薦入試	11	14	11	67	0
	3.AO入試	0	6	28	10	0

問8 貴学が大学入学選抜試験に、資格・検定試験を活用することで、どのような効果がありますか。

表 資格・検定試験の活用効果

活用効果 資格・検定試験		1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	3. 多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある。	4. 自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある。	5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある。	6. 資格・検	7. 入試業務の軽減に効果がある。	8. その他	無回答
		実数	総数 n=978	665	444	655	362	79	219	31
	英検(実用英語検定) n=256	182	93	156	117	15	44	1	8	5
	英会話(TOEFL等) n=144	108	63	75	58	13	50	13	7	0
	英検・英会話 n=129	107	80	102	14	4	29	15	0	0
	その他英語 n=21	3	1	15	7	2	13	1	0	1
	英語と英語以外の併用 n=29	29	29	29	4	7	8	0	0	0
	英語以外語学 n=70	50	36	37	16	11	16	0	1	8
	数学系 n=11	9	7	10	9	0	3	0	0	0
	簿記・会計 n=107	82	56	73	32	10	20	1	0	3
	情報処理 n=40	22	25	28	16	1	9	0	0	2
	その他 n=111	55	44	87	82	14	14	0	0	1
	不明 n=60	18	10	43	7	2	13	0	2	2

問9 貴学が大学入学者選抜試験に、資格・検定試験を活用する上で、どのような課題がありますか。

表 資格・検定試験の活用課題

活用効果 資格・検定試験		1. 資格・検定試験を活用して入学した学生について、資格・検定の修得により評価した能力にばらつきが見られ、一概に効果を見いだしにくい。	2. 資格・検定試験の中には、高等学校の学習指導要領に沿った内容となっていないものがあり、選定が困難。	3. 大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない。	4. 資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している。	5. 受験生の経済的負担が増える。	6. 資格・検	7. その他	無回答
		実数	総数 n=978	194	75	341	290	50	150
	英検(実用英語検定) n=256	51	11	108	74	22	23	29	31
	英会話(TOEFL等) n=144	33	3	35	45	14	32	12	37
	英検・英会話 n=129	23	4	47	57	3	10	18	25
	その他英語 n=21	1	2	1	6	0	1	12	2
	英語と英語以外の併用 n=29	1	20	24	4	0	20	0	0
	英語以外語学 n=70	20	4	30	8	3	6	0	17
	数学系 n=11	3	0	8	7	0	1	0	2
	簿記・会計 n=107	26	21	33	22	2	11	7	21
	情報処理 n=40	13	3	13	8	1	2	1	9
	その他 n=111	22	7	25	57	5	21	11	19
	不明 n=60	1	0	17	2	0	23	9	11

問10 問2で、大学入学者選抜試験に資格・検定試験を活用していない、と回答した場合、その理由をお聞きします。

表 資格・検定試験を活用していない理由

項目	1. 資格・検定試験で測られる能力(知識、技能等)が大学教育で求められる能力に対応したものか分からない。	2. 資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った内容になっているかどうか、分からない。	3. 活用にとって学内の体制、組織がない。	4. 活用するための方法が分からない。	5. これまでの選抜試験方法で特段問題ない。	6. 資格・検定試験の質や信頼性が判断できない。	7. その他
回答数	80	29	56	7	288	29	46

問11 問2で、平成27年度から実施を予定していると回答した場合、今後、貴大学においてどのような資格・検定試験の活用を考えていますか。また、活用しようとした理由についてもご記入ください。

表 資格・検定試験活用を考えている理由

活用効果 資格・検定試験		1. 資格・検定試験が高校の学習指導要領に沿った試験内容となっている	2. 特定の教科・科目について、能力を評価することができる	3. 特定の教科・科目について、勉学への意欲を評価することができる	4. 特定の教科・科目について、入学後に履修する科目に対する適性を評価することができる	5. 資格・検定試験の活用は、高等学校の段階における学習の達成度を把握することに役立つ	6. 他の同種の試験より廉価である	7. その他	N.A.
		総数 n=80	5	68	45	28	16	0	1
英検(実用英語検定) n=22	5	19	15	9	4	0	0	0	
英会話(TOEFL等) n=28	0	26	19	8	4	0	0	0	
英検・英会話 n=10	0	10	1	3	1	0	0	0	
その他英語 n=5	0	5	4	5	0	0	0	0	
英語と英語以外の併用 n=0									
英語以外語学 n=6	0	5	0	1	5	0	0	0	
数学系 n=1	0	0	0	0	1	0	0	0	
簿記・会計 n=1	0	0	0	0	0	0	1	0	
情報処理 n=0									
その他 n=7	0	3	6	2	1	0	0	0	
不明 n=0									

問12 問11で回答した、平成27年度から活用を予定している資格・検定試験について、どのような能力を評価しようとしていますか。

表 活用を予定している資格・検定試験の評価する能力

	評価する能力 資格検定	資格を有する又は一定以上の学力・技能がある	国語・外国語の会話力がある	国語・外国語に対する理解力がある	国語・漢字知識がある	作文能力	情報処理技術を持つ	簿記・会計知識を持つ	特技、専門的な技能を持つ	その他	無回答
		実数	総数 n=80	5	17	35	1	0	0	1	1
	英検(実用英語検定) n=22	1	4	12	0	0	0	0	0	0	5
	英会話(TOEFL等) n=28	2	8	12	0	0	0	0	0	0	6
	英検・英会話 n=10	0	1	6	0	0	0	0	0	0	3
	その他英語 n=5	1	0	4	0	0	0	0	0	0	0
	英語と英語以外の併用 n=0										
	英語以外語学 n=6	0	4	1	1	0	0	0	0	0	0
	数学系 n=1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	簿記・会計 n=1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	情報処理 n=0										
	その他 n=7	1	0	0	0	0	0	0	1	4	1
	不明 n=0										

問13 問2で、今後活用することを検討していると回答した貴大学の場合、今後、どのような資格・検定試験の活用を考えていますか。

表 学部別資格・検定試験結果活用の学科

	学部大分類	英検(実用英語検定)	英会話(TOEFL等)	英検・英会話	その他英語	その他語学系	数学系	簿記・会計	情報処理	その他	無回答	
実数	総数 n=71	33	20	5	9	4	0	0	0	0	0	
	人文科学 n=14	3	8	0	3	0	0	0	0	0	0	
	社会科学 n=7	0	4	0	3	0	0	0	0	0	0	
	理学 n=1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	工学 n=3	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
	農学 n=0											
	保健 n=6	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	
	家政 n=0											
	教育 n=55	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
	芸術 n=4	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	
	その他 n=0											
	不明 n=31	25	2	4	0	0	0	0	0	0	0	

問14 今後活用することを検討していると回答した貴大学の場合、今後、活用するためには、どのような条件がクリアされる必要があると考えますか。

表 活用するために クリアされる必要条件

学部中分類	1. 資格・検定試験の内容が学習指導要領に沿った内容になっているかどうかを検討することが必要。	2. 大学入学者選抜における資格・検定試験の評価手法を構築することが必要。	3. 高校や資格・検定試験主体者との協議を重ね、学内での理解を深めることが必要。	4. 資格・検定試験を活用した成果事例を収集し、参照できる仕組みを構築することが必要。	5. その他
101文学関係	1	15	1	8	0
103哲学関係	0	2	0	1	0
104その他	4	13	0	2	0
201法学・政治学関係	0	5	0	1	0
202商学・経済学関係	2	7	0	3	0
203社会学関係(社会事業関係を含む)	1	2	0	0	0
204その他	0	1	0	1	0
306その他	0	2	0	2	0
401機械工学関係	0	1	0	1	0
402電気通信工学関係	0	1	0	1	0
602医学(専門課程)	0	4	0	0	0
604歯学(専門課程)	0	2	0	0	0
605薬学関係	0	0	0	1	0
606看護学関係	1	2	1	1	0
609その他	2	5	2	5	0
801家政学関係	0	1	0	1	0
802食物学関係	0	2	0	0	0
901教育学関係	0	1	0	1	0
902小学校課程	0	1	0	0	0
909養護学校課程	0	1	0	0	0
910幼稚園課程	0	3	0	2	0
914その他	0	6	0	3	0
1001美術関係	0	3	0	3	0
1002デザイン関係	0	1	0	1	0
1005その他	0	1	0	0	0
1106人文・社会科学関係	0	1	0	0	0

問15 資格・検定試験の大学入学者選抜試験への活用拡大には、どのような方策が効果的だと思いますか。

表 資格・検定試験活用状況別拡大方策

問2 \ 問15	1. 大学入学者選抜における資格・検定試験の活用に係る一定のガイドラインを策定する。	2. 資格・検定試験について、今後とも入学者選抜試験に活用できるように、大学、高校、資格・検定試験主体者等で情報交換を行う。	3. 資格・検定試験を適性に評価できるような学内の人材育成、組織体制を強化する。	4. その他	5. 特になし
総数	381	161	99	20	147
1. ある	110	78	39	8	54
2. ない	230	58	44	9	85
3. 平成27年度から実施を予定	20	8	6	0	1
4. 今後活用することを検討	12	12	8	0	0
5. その他	19	11	5	3	8

## 主なアンケート調査結果：実施機関用

問1 平成25年度に実施した資格・検定試験の中で、高校性が受験した資格・検定試験についてお尋ねします。受験した高校生の多い分野を最大3つまで選択し、分野の番号を□欄に御記入してください。

表 資格・検定試験受験者総数

資格・検定試験の分野	総受験者数(人)	高校生全体(人)
1.医療	0	0
2.インテリア	38	0
3.オフィス技能	330,446	91,227
4.教育・学術	5,461,577	1,837,585
5.経営・ビジネス	72,016	7,438
6.建築・建設	113,899	9,481
7.交通・運輸	0	0
8.語学	4,951,488	781,106
9.国際業務	0	0
10.コンピュータ	349,003	259,070
11.財務・会計・金融	697,896	61,580
12.司法・法務	0	0
13.調理・衛生	113,281	109,945
14.デザイン	3,101	3,101
15.電気・通信	329	0
16.福祉	0	0
17.心理	0	0
18.労務管理	0	0
19.ご当地	0	0
20.趣味・教養	0	0
21.スポーツ	0	0
22.自然・環境	0	0
23.その他	833,749	73,773

問2 貴機関が実施している資格・検定試験について、どのような能力を測定していますか。  
また、当該能力は学習指導要領のどのような科目と対応していますか。

表 資格・検定試験の測定する能力1

資格・検定試験実施機関	資格・検定試験の名称	測定する能力
一般社団法人 日本溶接協会	溶接技能者評価試験	溶接の実作業の技量
公益社団法人 全国経理教育協会	簿記能力検定試験	
公益社団法人 全国工業高等学校長協会	情報技術検定	
一般社団法人 日本ライフスタイル協会	リビングスタイリスト資格試験	接客・礼儀能力、小売流通の知識、住生活商品知識
公益社団法人 日本工業英語協会	文部科学省後援工業英語能力検定	ライティング能力
学校法人 香川栄養学園	家庭料理技能検定	
公益財団法人 日本英語検定協会	実用英語技能検定(英検)	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
公益社団法人 インテリア産業協会	インテリアコーディネーター	
株式会社 教育測定研究所	CASEC	リーディング、リスニング
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEICテスト	リスニング能力・リーディング能力
国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部	TOEFL iBT	リーディング能力、リスニング能力、スピーキング能力、ライティング能力
公益財団法人 実務技能検定協会	秘書技能検定	
全国語学ビジネス観光教育協会	観光英語検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「食物調理」	栄養・調理に関する専門的知識技能の能力
公益社団法人 全国珠算教育連盟	珠算検定試験	計算能力
全国農業会議所	日本農業技術検定	農業の技術・技能及び知識の取得レベル
(一財)中央工学校生涯学習センター	トレース技能検定試験	写図・製図能力
NPO法人 日本ニュース時事能力検定協会	ニュース時事能力検定試験	思考力・判断力、知識活用能力、課題設定能力、課題探求能力、課題解決能力、資料収集能力、資料活用能力、資料選択能力、情報収集能力、情報処理能力
公益財団法人 日本英語検定協会	実用英語技能検定(英検)	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
特定非営利活動法人 日本語検定委員会	日本語検定	日本人として必要な日本語の知識とそれを運用する能力を、敬語、文法、語彙、漢字、言葉の意味、表記の6領域と読解の面から測定する。
日本情報処理検定協会	日本語ワープロ検定試験	※添付参照
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 準2級	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能
一般財団法人 日本中国語検定協会	中国語検定試験	リスニング能力、リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	日本漢字能力検定	漢字運用能力
特定非営利活動法人 世界遺産アカデミー	世界遺産検定	今の時代を理解する力、異文化理解の能力
公益社団法人 全国珠算学校連盟	全国珠算技能検定試験	
日本商工会議所	販売士	
一般財団法人 職業教育・キャリア教育財団	ビジネス能力検定ジョブパス3級	
特定非営利活動法人 ハングル能力検定協会	第40回「ハングル」能力検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
一般財団法人 家電製品協会 認定センター	家電製品アドバイザー・家電製品エンジニア資格	
一般財団法人 日本書写技能検定協会	硬筆書写技能検定試験	硬筆書写の実技能力、理論に関する能力。
公益社団法人 全国経理教育協会	電卓計算能力検定試験	

表 資格・検定試験の測定する能力 2

資格・検定試験実施機関	資格・検定試験の名称	測定する能力
公益社団法人全国工業高等学校長協会	パソコン利用検定	
公益財団法人 日本英語検定協会	TEAP	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
公益社団法人インテリア産業協会	キッチンスペシャリスト	
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEIC Bridge	リスニング能力・リーディング能力
国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部	TOEFL ITP	リーディング能力、文法能力、リスニング能力
公益財団法人実務技能検定協会	サービス接遇実務検定	
公益社団法人全国珠算教育連盟	暗算検定試験	暗算能力
公益財団法人 日本英語検定協会	TEAP	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
日本情報処理検定協会	情報処理技能検定試験 表計算	※添付参照
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 3級以下	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	文章読解・作成能力検定	読解能力・文章作成能力
公益社団法人全国珠算学校連盟	全国暗算技能検定試験	
特定非営利活動法人 ハングル能力検定協会	第41回「ハングル」能力検定試験	リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力、リスニング能力
一般財団法人 日本書写技能検定協会	毛筆書写技能検定試験	毛筆書写の実践能力、理論に関する能力。
公益社団法人 全国経理教育協会	所得税法・法人税法・消費税法各能力検定試験	
公益社団法人全国工業高等学校長協会	初級CAD検定	
一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	TOEICスピーキングテスト/ライティングテスト	スピーキング能力・ライティング能力
公益財団法人実務技能検定協会	ビジネス実務マナー技能検定	
日本情報処理検定協会	文書デザイン検定試験	
公益財団法人 日本数学検定協会	実用数学技能検定 2級	計算技能、作図技能、表現技能、測定技能、整理技能、統計技能、証明技能
公益財団法人 日本漢字能力検定協会	BJTビジネス日本語能力テスト	ビジネススキル、日本語能力
公益社団法人 全国経理教育協会	社会常識能力検定試験	
公益社団法人全国工業高等学校長協会	計算技術検定	
一般社団法人日本ライフスタイル協会	リフォームスタイリスト資格試験	接客・礼儀能力、建築知識、法規・税制の知識
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「被服製作」	被服に関する専門的知識・技能向上
日本商工会議所	日商PC	
一般財団法人職業教育・キャリア教育財団	情報検定情報活用試験3級	
公益社団法人 全国経理教育協会	文書処理(ワープロ・表計算)能力検定試験	
公益社団法人全国工業高等学校長協会	製図検定	
公益社団法人全国工業高等学校長協会	リスニング検定	
公益社団法人全国工業高等学校長協会	グラフィックデザイン検定	
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会	全国高等学校家庭科技術検定「保育」	乳幼児理解、幼児教育に関する専門的技術の向上
日本商工会議所	日商簿記	

表 学習指導要領の科目との対応

項目	国語	地理歴史	公民	数学	理科	保健体育	芸術	外国語	家庭	情報	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	福祉	該当なし	無回答
総数 n=65	5	2	2	3	2	0	3	18	6	6	4	14	13	0	5	0	0	7	1
2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
3.オフィス技能 n=7	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0
4.教育・学術 n=14	1	1	1	3	1	0	1	6	0	0	1	3	0	0	1	0	0	0	0
5.経営・ビジネス n=3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0
6.建築・建設 n=3	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0
8.語学 n=14	2	0	0	0	0	0	0	11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
10.コンピュータ n=8	0	0	0	0	0	0	0	0	3	5	3	6	3	0	0	0	0	0	0
11.財務・会計・金融 n=4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0
13.調理・衛生 n=2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
14.デザイン n=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
15.電気・通信 n=1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
23.その他 n=6	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0

総数は回答があった資格・検定試験の数

問3 問1で回答した貴機関が実施している資格・検定試験は、大学入学選抜試験に活用されていますか。

表 資格・検定試験の活用状況

項目	1. 資格・検定試験は大学入学選抜に活用されている。	2. 資格・検定試験は大学入学選抜に活用されていない。	3. 資格・検定試験が大学入学選抜に活用されているかどうか分からない。	4. その他
総数 n=65	31	11	22	1
1.医療 n=0				
2.インテリア n=2	0	0	2	0
3.オフィス技能 n=7	2	3	2	0
4.教育・学術 n=14	11	0	3	0
5.経営・ビジネス n=3	2	1	0	0
6.建築・建設 n=3	0	2	1	0
7.交通・運輸 n=0				
8.語学 n=14	5	4	4	1
9.国際業務 n=0				
10.コンピュータ n=8	5	0	3	0
11.財務・会計・金融 n=4	2	0	2	0
12.司法・法務 n=0				
13.調理・衛生 n=2	2	0	0	0
14.デザイン n=1	0	0	1	0
15.電気・通信 n=1	0	1	0	0
16.福祉 n=0				
17.心理 n=0				
18.労務管理 n=0				
19.ご当地 n=0				
20.趣味・教養 n=0				
21.スポーツ n=0				
22.自然・環境 n=0				
23.その他 n=6	2	0	4	0

問4 貴機関が実施している資格・検定試験の中で、現在は入試に活用されていないが、入試に関する能力を測定するなどしており、今後、活用の可能性があるとお考えになっている試験はありますか。

表 大学入試に活用可能性がある試験

資格・検定試験の分野	活用可能性がある資格・検定試験名称					実施機関名称
1.医療						
2.インテリア						
3.オフィス技能	硬筆書写技能検定試験	毛筆書写技能検定試験	社会常識能力検定試験			公益社団法人全国経理教育協会 一般財団法人日本書写技能検定協会
4.教育・学術	ジュニアマイスター顕彰					公益社団法人全国工業高等学校長協会
5.経営・ビジネス						
6.建築・建設						
7.交通・運輸						
8.語学	CASEC	TOEFL ITP	観光英語検定試験	文章読解・作成能力検定	文部科学省後援 工業英語能力検定	株式会社教育測定研究所 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 全国語学ビジネス観光教育協会 公益財団法人日本漢字能力検定協会 公益社団法人日本工業英語協会
9.国際業務						
10.コンピュータ						
11.財務・会計・金融	簿記能力検定試験	計算実務能力検定試験	所得税法能力検定試験			公益社団法人全国経理教育協会
12.司法・法務						
13.調理・衛生						
14.デザイン						
15.電気・通信						
16.福祉						
17.心理						
18.労務管理						
19.ご当地						
20.趣味・教養						
21.スポーツ						
22.自然・環境						
23.その他						

問5 問3で大学入学選抜に活用されていると回答した資格・検定試験について、平成25年度に受験した高校生は何人でしたか。

表 大学入学選抜活用資格・検定試験受験者数

	総受験者数(人)	高校生全体(人)
1.医療	0	0
2.インテリア	0	0
3.オフィス技能	117766	51067
4.教育・学術	5242172	1629107
5.経営・ビジネス	69728	7413
6.建築・建設	0	0
7.交通・運輸	0	0
8.語学	4851656	762501
9.国際業務	0	0
10.コンピュータ	235733	145800
11.財務・会計・金融	697896	61580
12.司法・法務	0	0
13.調理・衛生	113281	109945
14.デザイン	0	0
15.電気・通信	0	0
16.福祉	0	0
17.心理	0	0
18.労務管理	0	0
19.ご当地	0	0
20.趣味・教養	0	0
21.スポーツ	0	0
22.自然・環境	0	0
23.その他	92778	73773

問6 貴機関が実施する資格・検定試験が、大学入学選抜試験に活用される場合、どのような効果があると思いますか。

表 大学入学選抜試験に活用される効果

項目	1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある。	3. 大学は多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある。	4. 大学は自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある。	5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある。	6. 資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学者選抜の実施に効果がある。	7. 大学の入試業務の軽減に効果がある。	8. その他	
実数	総数 n=54	30	9	23	8	12	16	10	7
	2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0	0	2
	3.オフィス技能 n=6	1	0	5	0	0	0	0	0
	4.教育・学術 n=6	6	2	2	2	2	2	0	2
	5.経営・ビジネス n=3	1	0	1	0	0	2	1	0
	6.建築・建設 n=3	1	0	1	1	0	2	0	0
	8.語学 n=16	12	2	4	2	4	7	8	3
	10.コンピュータ n=5	1	3	4	0	3	2	0	0
	11.財務・会計・金融 n=4	4	0	1	0	0	1	0	0
	13.調理・衛生 n=2	2	1	0	1	1	0	0	0
	23.その他 n=7	2	1	5	2	2	0	1	0

問7 大学入学選抜試験に、貴機関が実施する資格・検定試験の活用をさらに推進する際、貴機関にとって、どのような課題がありますか。

表 大学入学選抜試験に活用を推進する課題

項目	1. 資格・検定試験の成績の提示方法により、同じ成績でも評価した能力に一定の差がある。	2. 資格・検定試験が測定する能力と、高等学校の学習指導要領との対応が困難。	3. 大学側が大学入学選抜に資格・検定試験を活用する際、その資格・検定試験にどのような能力を期待しているのか不明。	4. 資格・検定試験で測られた能力が大学入学選抜において適正に評価されているか不明。	5. 受験生の経済的負担が増える。	6. その他	無回答
総数 n=62	1	10	20	12	6	8	20
2.インテリア n=2	0	0	0	0	0	0	2
3.オフィス技能 n=7	0	0	4	0	0	0	3
4.教育・学術 n=14	1	0	2	3	2	1	8
5.経営・ビジネス n=3	0	1	0	0	0	0	2
6.建築・建設 n=3	0	0	1	0	0	0	2
8.語学 n=13	0	7	3	2	2	5	2
10.コンピュータ n=8	0	0	6	3	1	1	0
11.財務・会計・金融 n=4	0	0	3	0	0	1	0
13.調理・衛生 n=2	0	0	0	2	1	0	0
14.デザイン n=1	0	0	1	0	0	0	0
15.電気・通信 n=1	0	0	0	0	0	0	1
23.その他 n=4	0	2	0	2	0	0	0

問8 貴機関では、実施している資格・検定試験の質の担保をどのように図っていらっしゃいますか。

注：本文中で紹介。

問9 資格・検定試験を大学入学選抜試験に活用していくために、どのような方策が効果的だと思いますか。

表 大学入学選抜試験に活用していく方策

項目	1. 大学が求める学力水準を判定するための参考資料として、学力試験と併用して資格・検定試験の活用を進める。	2. 資格・検定試験について、今後とも入学選抜試験に活用できるよう、大学、高校等と情報交換を行う。	3. その他	4. 特になし
実数	15	13	3	4